



里見八犬傳

第九輯

四十六七

~ 13
3986
3



門へ13
3986
卷3



八犬傳第九輯卷之四十六簡端附言
本編の題目の先板卷の四十五までの總目録の下に夙々附出せしむるを看官の
結局まで趣を知らせむ欲し一僻所為を彼六回の當日腹稿の大槩を擧ぐる
其後本編を編る及びて豫思ひより長くあらざることを然ども一卷毎小定
數ありて作者の自由な做しなされば已とせざるに一回を釐して或は上下或は中下と
二回三回分ちて其數を合せたり抑一回を釐して二回三回做さし唐山の稗史小
説ふの例る。只源氏物語若菜の上下ありといへども本傳の源語不校の專
唐山の稗史も馮元自文溪堂の性急を羊冊稿ト畢れが隨て奪ひ去りて淨書刷
入のふ遊與ま故後に至りて不都合なことを先刊刻する所の五卷を發販せん
とせしむるが這簡端の餘紙ゆも事情と畧記してゆき其責を塞ぐ而已

天保十二年辛丑秋長月之吉

菘笠漁隱



八犬傳九輯卷之四十六

文藝堂藏

天保十二年十二月二十日寄
原三郎

南總里見八犬傳第九輯卷四十六第百七十回以下再出總目錄

○卷之四十六 第百七十七回

一顆智玉途懲一騎驕將 四個保質反捉兩個保質

同卷 附録目 此段不釐回 但有附目已

建柴道場毛野謁守如墓 湯嶋茂林道節破三隊敵

○卷之四十七上 第百七十八回

有種雪恥復歸御黨 大水陸濟度眾鬼

○卷之四十七下 附録目 此段不釐回 但有附目已

里見諸將士凱旋稻村城 安房侯博愛賑隣國窮民

○卷之四十八 第百七十九回上

照文歸東房總多福 東西和睦兩國開津

同卷 第百七十九回中 附録目

義成面十二敗將 助友受秘封一匣

○卷之四十九 第百七十九回下 附録目

成孝全孝別故君 孝嗣仗義辭舊主

○卷之五十 第百八十回上 附録目

一姬一僧死生等榮貴 孝感力藝詠歌賀奇異

同卷 第百八十回中

義成重賞功臣妻八女 初段

同卷 第百八十回下



義成重賞功臣妻八女後 信隆還任舊城免罪過

○卷之五十一 第一百八十勝回上

狐龍貽化石、大蟬脫 八行反壁八行傳十世

同卷 附録目 此段不釐回 但有附目已

信隆宗盈古江逢孝嗣 政木大全論辨引和漢

○卷之五十二 第一百八十勝回中 附録目

延命寺義成賞牡丹花 富山崖念成見遺題歌

○卷之五十三 第一百八十勝回下 附録目

犬士退隱樂天命 諸將得失備其尾

○卷之五十三下 回外剩筆

頭陀話説枕中四十八城 稗史大成本傳二十八

通計六回分回附録目共一十五回

先板九輯卷の四十一の簡端の附載。回外剩筆の題目。二十七年とある。去
歳の冬、結局大團圓まで編果さす。思ひ故之介。作者病眼の障りあり。そ
一稔後れり。今改正す。二十八年とある。只是のる。一回と釐して上下。或は上中
下。二回二回做し。ゆる。上の如し。釐して。一巻一回の。附録目と
見せし。看官の爲。葉の做え。其。其餘の附録目。其。卷の端。出。其。有。の
第百八十回の上。一姫一僧云々の一回と第百八十勝回の中。編と下。編云々の二回
と。是の。其餘。只。回を釐して。二回二回做す。其。附録目。出。先。案。後。案
同。ト。か。ね。首。の。六。回。を。幹。め。く。附。録。目。の。枝。葉。を。入。此。彼。都。合。せ。る。の。あ
る。と。看。官。訝。り。思。ふ。事。の。所。以。を。識。者。介。也。

先板第九輯卷之四十一至四十五校閱遺漏再訂抄録

○四十一の巻 後序三右 冷山平燕兩管合傳 同巻 射朝寧 同巻 同巻 同巻

救永死符 同巻 射朝寧 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻

百八十勝回孤龍 同巻 射朝寧 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻

○四十二の巻 義道 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻

同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻

同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻

同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻

同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻

同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻

同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻 同巻

南總里見八大傳第九輯卷之四十六

東都 曲亭主人編次

第一顆の智王途ハ一騎の驕將と懲ま 四個の保質及て兩個の保質と捉る

却説犬山道節忠與と印東小六明相荒川太郎一朗清英等と共侶小十三

百餘の隊兵をモ高隊水路の總大将扇谷定正の逃るを遠く追蒐る河崎矢

口の河原を迂通り又敷破り既小橋を去り扇谷の忠臣にける巨田新

六郎助友が僅小五百の兵をねり逆安危と計り路の去向の埋伏差を見れば

道節們を遮り林をめぐり防戦ふ其鋒尖凡庸を兵法七書ハ父道灌の教不

仗りて奥義を極め進退よく其度二稱あり寡多の血氣敵を不足る武勇

由亦義秀親衛伯仲安死本事あり且相従ふ隊長最中隼人生入永六秋

孰小紋決まらば、喚做するに、煨煉毎王と賞けり相戦ふ大刀風烈、かりければ左右より
 敵も破られ、遂莫追隊の頭人、則是犬士一人名高、大山忠興、その折をゆる
 昔君先父の怨を復果さんと、思ふ勢、烈火の如く、馬を縦横に馳融して、敵を斫る
 正數を知らむ。又、明相清英も、千変萬化の術を盡して、堅を摧、銳を劈く。其
 隊の雄兵一人として、那進退、由らぬ、たゞ敵の隊兵、三倍、其勢の為、不殺、頼
 助友が頼切、生入、秋、孰、多、ゆ、え、士、卒、多、く、敵、捕、ら、れ、て、助、友、も、針、の、外、に、淺
 瘡、二、所、負、ひ、く、是、も、思、ひ、け、ん、百、六、足、る、を、り、や、る、殘、兵、を、引、圍、む、且
 戦ひ且退く、三町許、水際、不敵、枯草、を、推、分、け、り、踏、開、け、り、裏、面、入、る、と、見
 る程、道、即、透、さ、る、趕、鬼、未、也、其、馬、疲、勞、れ、跌、れ、り、檣、と、平、張、俯、ち、り、と、主、を
 慌、せ、騎、を、終、ふ、又、蝮、く、青、鞆、を、解、捨、て、傷、下、り、程、あ、る、は、明、相、清、英、隊、の、兵
 們、も、推、續、け、り、趕、逼、り、多、く、只、這、一、拳、助、友、を、捕、ま、せ、ん、と、競、ふ、甲、斐、な、く、

那敵、豫、准、備、あり、這、頭、の、枯、草、の、那、方、大、隱、一、措、け、り、快、船、三、艘、あり、開、戦
 既、小、難、義、我、不、及、び、助、友、の、殘、兵、等、と、共、其、船、を、り、乗、り、と、り、な、る、漕、ひ、は、汀、渚、を
 離、れ、り、前、面、の、岸、を、退、く、道、節、明、相、清、英、の、夜、視、も、風、透、り、觀、て、他、之、
 と、叫、ぶ、を、趕、ま、る、小、船、を、け、り、夫、口、の、津、へ、所、敵、の、柱、方、を、目、送、り、方、开、か、中、道
 節、の、憶、も、太、息、吻、く、舊、の、河、原、へ、退、り、士、卒、を、獎、を、聲、高、す、り、や、れ、兵、每、助
 友、奴、の、豫、より、活、路、造、り、て、逃、れ、る、那、奴、の、我、志、を、敵、に、あ、る、憶、は、定、正、と、王
 徒、僅、小、二、三、騎、の、も、と、夫、口、を、渡、り、果、て、も、あ、る、我、馬、疲、勞、れ、て、敵、死、れ、る、も、其
 頭、小、敵、の、乘、乗、る、馬、あ、る、む、素、心、で、も、蝮、く、牽、り、て、來、よ、と、く、せ、む、と、焦、燥、叫、ぶ、を
 明、相、清、英、左、右、も、急、に、推、林、示、め、り、且、諫、る、を、大山、大人、叫、び、弱、冠、を、我、們、が
 詞、弁、く、賢、達、で、意、見、を、舒、る、鳥、濟、多、く、を、釋、迦、に、説、經、孔子、の、語、道、の、諺、を
 似、て、い、へ、も、既、小、館、の、御、軍、令、を、逃、敵、の、追、棄、よ、と、ある、御、條、目、を、忘、れ、ぬ、り、定、正

主の大人の為（おのり）の不（おろ）し舊君先考の仇（おん）へとも既（お）よの春高嶽（はるたかね）や。那人の頭（あたま）鑑（か）を射（い）く
 落（おち）して怨（うらみ）を復（か）へぬ（む）べし。然（しか）るを又今日（こんにち）の其子朝寧（あさね）と遠前（とほぜ）被（ひ）て射（い）ぬ
 事（こと）十二分（じふにぶん）の首尾（おもひさき）ある。飽（あ）む（む）敵地（あまた）の深入（あつり）を。夜（よ）を犯（か）して還（かへ）る（を）と忘（わ）れぬ（べ）し
 甚（お）麼（ろ）ぞ。言（こと）憚（は）みへとも只是千慮（せんりょ）の一失（ひとひち）。誤（あや）三省再思（さんしょうざいし）あり。彼（か）と詞（ことば）麻（あ）る
 論（ろん）ぞと道（みち）節（せつ）听（き）り合（あ）笑（わ）く。現（いま）にあら其理（そのことわり）あり。実（まこと）は今日（こんにち）の開戦（あひま）は是（こゝ）而（こゝ）館（たて）の奉（ほう）
 為（な）す。我私（われひつこ）の所以（そのゆゑ）なる（も）。定正（ていせい）の敵（かた）の魁首（けいしゅ）。今根（いまね）と断（こと）て棄（す）て枯（か）ら（る）後（のち）
 又患（またあや）と做（し）然（しか）に館（たて）の御軍令（ごぐんれい）。仁義（にぎぎ）を言（こと）と名（な）を。一方（ひと）は將（まさ）する者（もの）の詔（みこと）救（すく）
 用（もち）ひ（り）る所（ところ）あり。あ（と）も。曩（な）御軍令（ごぐんれい）とされ。時我（ときわれ）又館（たて）不請（ふとん）も。て憊（あや）むと談（わ）し稟（まこと）
 あり。然（しか）と仁（に）の一字（いちじ）不（お）泥（で）も。那宋襄（なそうせう）の故轍（こてつ）と踏（ふ）ま（る）世（よ）の胡慮（こりょ）なる（も）。あ（と）れ（ど）
 和殿（わだん）の意見（いけん）も亦（また）金王（きんおう）今夜（こんや）と犯（か）して敵地（かた）入（い）り。人馬（ひとば）の疲勞（つかれ）と思（おも）い又助
 友（とも）の相似（あひま）。敵（かた）の援兵（えんぺい）出（い）る（も）。後悔（ごくわい）其里（そのこゝ）達（た）ち（か）らん。鄙語（へいご）不（お）云（ふ）し。威（い）ふる子（こ）

浅瀬（あさせ）と教（し）ら（る）。我上（われうへ）あり。れ（ど）の（と）つ（つ）呵（か）々（々）ち笑（わ）へ。明相清英（めいせうせいへい）欲（ほ）び（て）弱冠（じやくわん）
 る我（われ）們（ら）が愚意（おろ）を稟（ま）し。試（し）し海容（かいよう）あり。公私（こうし）の幸（さい）も還（かへ）る（も）。久（ひさ）末（まつ）道節（みちせつ）郎（らう）
 答（こた）へ。然（しか）ハと。我憶（われおぼ）ふ妙（めう）真音（まことね）。吾（われ）單（たん）即（つ）保質（ほしち）捕（と）入（り）ら（れ）て五十子（いじゅうし）の
 城（しろ）在（あ）る。彼（か）定正（ていせい）城（しろ）還（かへ）る。他（た）必（かな）殺（ころ）され（ん）。且（かつ）河崎（かき）まで退（か）れ（ん）。又（また）細（こ）く
 向謀（むさう）見（み）ゆ。那里（かた）の虚実（きよまこと）を視（み）ゆ。翌（あ）の早天（はやてん）推寄（おしよ）。徑（みち）小城（せうじやう）と攻落（おと）して四
 個（こ）の女子（むすめ）と救（すく）ひ合（あ）ふ。女（おんな）の多（おほ）さある。ゆ（ゆ）の（と）の（と）不明（ふみょう）相清英（せうせいへい）再（ま）談（わ）し及（およ）び（て）進（しん）諾（だく）する
 ひや。俱（お）の士卒（しそく）と従（したが）ふ。灰（か）の見（み）ゆる八日（やくにち）の影（かげ）と燭（あかり）小河崎（せうかき）邊（へ）なる。故（ゆゑ）の馬頭（ばだう）上（かみ）不
 退（か）る。程（ほど）馬洲（ばしゅう）場（ば）九郎（くらう）の殘黨（ざんだう）と首（くび）を。那（そ）這（こゝ）の使客（しやく）野武士（のぶし）の毎里（まいり）見（み）の徳（とく）を尊（た）ぶ
 ぶ者（もの）招（ま）び（て）走（は）走（は）集（あ）む。皆（みな）道節（みちせつ）の隊（たい）不（お）附（つ）く。一（ひと）夜（よ）の向（むか）道節（みちせつ）の軍威（ぐんい）い（ま）く。壯
 ち。從（したが）兵新（しん）舊（こ）うち合（あ）せ。五千（ごせん）餘（あ）名（な）小做（せう）り（ける）。案下（あんげ）某生再説（べいせいざいせつ）扇谷定正（せんたかていせい）
 大山道節（おほやまみちせつ）の追逼（おしひ）られて既（い）不（お）必（かな）死（し）の窮難（きゆうなん）做（し）り。且（かつ）曩（な）大憎（おほおどろ）しと思（おも）い（る）巨甲（きゆうが）新

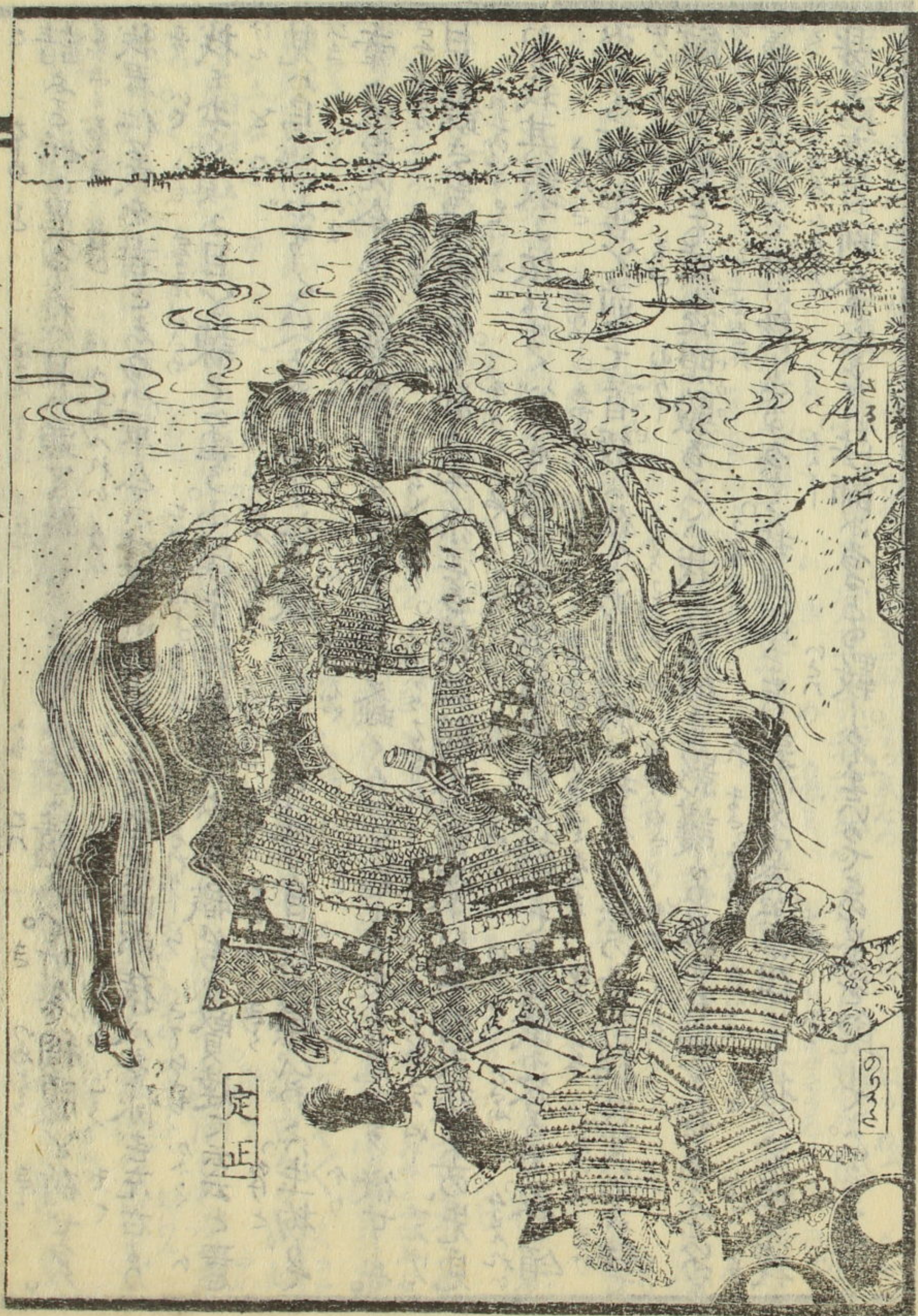
小水目堅宗傳 小水目初め...

六郎助友が。這敗軍と量りて。其去向は。現ひ知り。折と。那隊も極れて。細魚の網と漏る像。而敵の勝負と見ゆ久き。身は只大石憲儀と。僅か二騎。前岸へ渡さん。矢口と投ぐ。程も既や。日暮る。幽け。月を心當。件の津。...

聲と戦て。急や。追隊の頭人。找大石憲儀。寡君か。宣ふ。要時。請制め。却定。正。向。以て。詞。急。迫。小。湊。目。隊。兵。推。制。め。從。之。找。と。考。左。見。右。見。て。位。と。憲。儀。向。以て。和。殿。主。從。之。期。及。び。て。又。何。事。と。い。ふ。ま。き。や。と。回。ハ。憲。儀。然。り。と。古。より。一。言。窮。鳥。懷。入。ると。い。獨。支。也。捉。ら。せ。と。い。思。ふ。違。ひ。今。日。の。敗。軍。両。二。番。の。虎。口。と。脱。れ。和。殿。の。獲。せ。と。是。も。恥。又。是。より。甚。く。在。る。我。今。あ。ら。自。殺。し。て。首。と。和。殿。不。捕。美。し。い。く。寡。君。を。饒。し。ね。か。と。を。定。正。推。禁。め。の。然。る。を。せ。憲。儀。の。我。愛。臣。免。れ。共。侶。小。左。も。右。も。多。く。べ。れ。と。の。わ。れ。て。憲。儀。感。謝。ふ。堪。を。跪。た。速。く。又。只。目。小。向。以て。尋。小。湊。主。今。の。言。と。ま。れ。る。願。は。佛。眼。佛。意。と。い。ひ。で。見。道。一。の。ひ。ね。か。と。倍。話。を。目。の。冷。笑。ひ。て。開。い。又。武。士。不。似。け。る。ら。若。柳。這。回。の。關。戰。の。寡。君。義。成。の。本。意。不。あ。る。管。領。非。義。の。大。兵。を。...

安房下總を水陸より攻伐するに急るれば身の危殆を防ん為軍師胤智と
 防禦使忠興と礼儀者を以て水路の勝負を試み天道へ順を祐けて不義の驕
 慢を罪責所以也。小兵を以て大敵小克を以て至らざれば然るを義成戦ひ負ふ
 馬前小命と云ふても管領饒阿良也。人をも身をも思ふ義成阿容の言を孰
 听く。死を避莫義成仁君之安房へ俱一まわるとも御命不及也。死を疾々立
 せぬればと護促して饒阿良定正竟小脱る路を敵一需要時の暇を請ふ腹を
 研らんと坐と占ると。憲儀急推禁めて又叫びて領せ又復目小向ひくや。既
 既小和殿の稱を如く安房侯義成。実小仁君るる人を殺して己と利を豈
 ひぬや。あつて憲君必く頭髪を剪て首級小代人と宣ひ。其の義を兼容の
 ねかと口説を定正喚禁めて。あふ憲儀又く思へ我管領の大職小在るや。然
 然しも命の惜るも。頭髪を剪て敵小遞與上へ先祖を辱め下へ兒孫小

汚名と傳ふ。恥の上の恥るるを只潔く死す不如此と泣け。憲儀聲を頻單て。君
 忘れぬ。欲昔建武二年冬十一月等持院尊氏將軍鎌倉小在るや。時大
 塔宮の御事より。後醍醐天皇逆鱗甚く。義貞主と討隊の總大将の
 做され。官軍多く發向とす。等持院殿驚に怕れて。逆意を以て證据を
 とく。みづ頭髪を剪り。錦小路殿。並ふ當家の御先祖を
 諫めり。口得思ひくを以て。親姑峯竹下老官軍と數破りあり。竟ふ
 御運と用を以て。傳て今の柳營。義尚。小至らざるのふり。然る其比那御頭髪を
 短髪を紛えそ。近習自外様の武士も。故意頭髪を短く。威其鬚をせ。つと
 一束剪と唱へ。風俗今改め。徳る先蹤小非如今の難義の為。頭髪を
 剪せぬ。御恥辱小似く。恥辱小あ。史大功の細謹を顧。大礼小讓。髪を
 ぎとの古語。何ぞや思召さ。りけん。只任用せぬ。ねと説諭。目小向ひく。



敗將頭髪を切て
 みるる首級小易
 文溪堂藏

請ふと始り異るる目頭と敵... 我君仁義を旨とあめぬ軍令... 我と出づ俱小目と諫め... 見へ鳥詩かきく... 牽りてゆえ今や... 目ハ饒さぞ... あり我其教... みる頭... 饒さ... 憲儀... 身も長友...

返ま目ハ... 及ぶ... 夙く... 下... 棄て... かく定正... 去又... 四郎... 馬頭... 火を... 儘して...

尚傳囚の異なるも。身寸鉄も帯るより。そは馬に乗せられ。敵の小頭人範内
兼四郎が。一隊の士卒を送られ。津と素ねてゆく程。兼四郎も亦隊の兵。蕉火致
作らる。鳥夜を照せる火光と見てや。下流より忽馬と流り来る快船あり。其船三
四艘あり。一艘毎小隈甲の武者。二十名うち乗る。或の船を推し竿を使ふ。
波の上自由をけん先小枝を。船の内より。忽地の聲をきり。其里もをゆる騎馬の二
人の我君扇谷殿おどろきまきや。信濃の巨田新六郎助友と名告る。うち
波く定正の歡し。ふ恥と思ひ。馬を駐り見らる。原来助友恙なき。我れを
汝の援ふも。那犬山道節の困を辛く免れて。大石憲儀と僅に二騎来る。路を
又敵ありと告ると。助友へ。船より立出。主の身邊に来る程。後れ
船も皆漕着て。岸に寄り。わたり。只助友と同船。士卒の相従。主の
後方侍り。定正見。面をひき。馬より下立。程よ。石小尻を掛。範

内兼四郎と隊の兵。ち。田を。四維列れる。當下定正。又助友。ち。向ひて。終
薪六郎。今。ゆ。告る。の。面。伏。る。れ。も。我。那。里。見。の。伏。兵。る。小。湊。目。堅。宗。と。ち。ら。が。數。百。の
敵。捕。縛。ら。れ。て。免。る。る。も。あ。ら。う。と。大。石。憲。儀。の。意。見。よ。り。頭。髻。と。剪。り。堅。宗。は
取。せ。且。憲。儀。の。我。代。り。と。敵。捕。縛。せ。れ。り。の。う。ち。那。堅。宗。は。友。好。意。あ。り。者。ゆ。り。
我。不。従。者。を。を。憐。れ。け。り。一。隊。の。兵。百。名。許。と。り。我。を。送。ら。せ。り。造。り。置。表。の
汝。の。諫。め。を。听。く。我。身。單。り。る。ま。は。よ。く。士。卒。を。喪。ひ。と。百。千。番。悔。及。汝。
亦。何。し。と。我。が。這。河。原。に。來。り。と。知。り。那。犬。山。道。節。の。言。兵。を。防。死。て。身。の。恙。な。く。
又。逢。ふ。と。は。我。と。迎。る。忠。誠。感。を。あ。ま。り。あり。賞。ま。べ。し。と。只。願。言。ひ。己。さ。り
を。助。友。の。嗟。嘆。小。堪。ま。愀。然。と。と。答。る。や。既。小。の。期。不。至。り。て。臣。等。が。前。言。不
幸。中。て。當。り。と。又。の。べ。く。臣。等。が。今。宵。の。地。に。在。り。て。趕。來。ぬ。敵。を。防。死。の。別。
仔細。の。事。今日。の。順。風。の。異。る。れ。柴。浦。へ。斜。之。君。退。せ。ぬ。時。必。や。河。崎。へ。御。船。と

寄させぬべけんと思慮らう。一旦の道節が雄兵を防たぬくの事も里見の軍師大阪
 毛野も豫六の義と思ひけん他先へ伏兵を這頭不在せしければ竟も臣も援
 兵の徒事の作りも今兼る悔いさ然るを大石憲儀の一騎を従ひまら
 とも君辱めらうと死の臣死すと公苦節を思つて阿容て髣と前せまつて那身の
 敵おれく去れり言語絶する僻事をも今論ずとも亦益る他左もあれ右
 あれ恙もまさぞ拜見へ有と死まを本意不稱ぞ致しくいられと答て傷る敵兵
 焦火の光お就く名告とある。鮫内兼四郎們の事の致ひを舒く兼四郎の一個の
 雑兵不持せざる。定正の両刀と助友不遞與しての事。の事ぞ知ぬむや。寡君義
 成仁義と宗とまあどりて。八犬士の毎ゆえ物數る及我隊長小湊目堅宗も
 至るまで皆軍令に従ふ。殺代を功とせまの故小虜も死敵の總大将を
 送りくあよ至れるん他の亮木且あゆむとの助友羞る色あり少選あ

答るやうのりく。処然もあえ。里見殿君臣の賢あて仁心も及ぶもあねも。敵
 藩中も入る死よわの辟言我父道灌の如た。當家の大夫であらう。今番の敗を
 豫も。知る糟屋小屏居して諫難を甚麻も。と論者君もあぬべ。遠賞
 世の常言も。良月明るく欲をれ。浮雲目足を掩ひ蕙蘭敏然り。欲を
 れ。秋風是を破れり。況や船中流不横りて。渡ま由る死者。縦犯一諫るとも。
 大厦の將小傾んと。幸と死小一本のよ。柱をあ。和殿安房へ入り去る。里日
 の。我與小大阪大山諸大士の。義を言傳ぬ。又小湊生。今宵の好
 意と感謝。堪どとの。且く心ゆひてよ。と。定正も見久。詞短く。芳
 ふを兼四郎の唯々と。不言兼も。退て。隊の兵を領て河崎る。馬頭上を
 投て還る。火の光りの見を。助友送目送りて卒との。両刀を
 軀く。王君小あ。定正の面る。合る。腰小帯て。新六郎折

よ東の舟の船も、益々前岸へ渡りぬ五十子の城も還りて、意表と警え、
 舟もくといそがせ、助友答く、否五十子の御城の敵既攻捕りて入替りぬひけり、
 小那八武士等へ一個の兵法未煉の者、就中大阪毛野の智術小長、うとをいふ、
 料多御高、大山道節の君と、野の徑、衆艦と、柴浦、漕と、舟と、五十子と、
 畧りのひけん、あつん、御留守、ゆり、其田、取蘭、二、と、の、あて、他を防、
 ぬ、水路、自家の敗軍と耳、怯して、逃去、なる、あ、の、久、臣、等、が、隊、兵、今、猶、一、千、
 の、ひ、後、攻、と、ま、け、れ、も、御、向、の、大、山、道、節、の、勢、の、兵、と、防、に、戦、ひ、時、士、卒、と、
 く、撃、せ、る、思、ふ、の、を、中、其、甲、斐、る、一、且、河、鯉、の、城、小、造、り、を、修、而、敵、の、進、退、と、那、
 里、の、安、危、と、向、定、り、徐、五、十、子、へ、還、ら、せ、あ、り、殊、御、失、る、所、へ、御、向、臣、等、の、情、
 地、遠、見、の、士、卒、と、遣、り、て、君、の、脱、れ、來、ぬ、道、路、と、視、せ、し、も、て、風、知、ぬ、初、河、
 崎、の、憲、儀、等、が、那、牛、馬、買、賣、る、馬、幾、疋、を、奪、合、せ、る、ふ、より、元、民、們、起、

て立て、此難義小及せぬ、若、那、日、恭、微、り、せ、道、節、が、追、敷、も、多、く、欲、ま、
 とも、時、後、れ、て、及、ぶ、べ、く、毛、然、心、の、臣、等、が、援、兵、の、敵、の、伏、兵、小、湊、們、と、敵、破、り、追、
 走、ら、せ、て、必、や、辱、小、逢、せ、ま、る、べ、く、し、り、一、今、の、千、萬、の、も、益、り、一、卒、河、鯉、の、城、
 俱、一、ま、あ、ん、の、議、小、儘、せ、ぬ、を、也、と、言、丁、寧、小、諫、れ、定、正、の、の、も、多、く、恥、く、
 答、も、の、せ、を、姑、且、と、い、や、う、曩、矣、我、思、ひ、惑、て、汝、の、親、道、灌、と、久、く、遠、離、
 の、も、の、汝、の、諫、と、听、せ、て、あ、の、大、敗、小、及、び、小、青、松、の、操、終、始、易、ら、ぬ、今、日、
 再、度、の、送、迎、現、我、家、の、范、彘、を、哉、今、も、志、を、更、り、賢、小、親、を、任、と、退、け、
 會、秘、旨、の、恥、と、雪、め、り、欲、を、左、中、右、中、從、さ、ん、也、河、鯉、へ、も、く、と、公、助、友、
 小、兼、と、馳、て、定、正、と、請、立、せ、つ、其、馬、を、も、船、小、乗、せ、て、隊、兵、と、俱、前、岸、へ、渡、り、
 又、定、正、と、馬、小、乗、て、那、身、も、俱、一、疋、の、送、れ、る、馬、ふ、ら、踏、つ、且、隊、の、兵、と、相、從、
 通、霄、路、次、と、い、え、死、け、り、休、題、再、説、の、日、十、二、月、八、日、の、曉、天、不、烈、婦、喜、喜、音、
 料、多、も、

那大茂林の澳邊邊老仁田山晋六武佐の柴薪船と燔敷せし時那身の又短く
 大洋ふ跳入りう燬と免れて浮つ沈つ程小音音の武藏の川畔で成長ふ
 田斐あつて水戯自得の老婦あつた約莫一里有餘る波瀾と凌ぎ辛く
 大茂林濱ふ就か大寒の日潮水ふ没て且風波ふ探く身冷る脚疲果て
 ぬもあつて作りけん品不携り身起しとて僅ふ兩三歩憶む僕地と轉輾ひく
 開が終息の絶けり浩る処這浦邊る漁戸們今日も那水戦の勝敗と心許なく
 思ふあつた西三人立出て澳の方を眺耳て立在むと平响許憶む磯松の真送り
 音音が臥うと見せり訝りて皆空そと又と見るふ六十有餘の老婦老全身潮水
 濡れ原來破船の浮死骸の今朝の這暴波ふ打揚られる者多飲と推流
 とそ左右もそのと命と鬼起す動脈猶も似て身亦温えれば原來の死
 ぶりけり疾喚活よと聲と合して喚る物拵て介抱綱と盡程小音音の息出

眼と睜りもど動くせむのこのと得られ漁戸們のうち聞れ且憐且勤りて
 苦屋不吊を免て地炕の邊り不臥を免隣人們の復を来ゆを己が宿所還りけり
 後而家主の女房が屢柴と折焼給那身を温ると西三時刻且貯藏の清心丹を
 薦る程小音音のやうな我小復りて愕然として醒方如く身起り膝折布を
 主人主婦不向ひてやう料ら成りける御好意を一旦死し我身も今再生の
 歎ひありそふ御恩を侍るか謝され主人の女房と共侶小含笑て原來本腹を
 まけ抑媪の那里の人と問ふ答く然るるとなるふ応難つやあつた
 奴家の浦河る漁夫の母を信ら今日安房の洲崎の澳で水戦あつた
 上總へ急要ある故未明ふ船と出まを備航子と備せ小猛可風波吹息茶
 れ流さると幾里なりん這頭の浦小寄き甘時哀しや船の品不碎は舵工
 我身の暴波の底もつとを陥入り小我身の素是女良の延戸を少かり

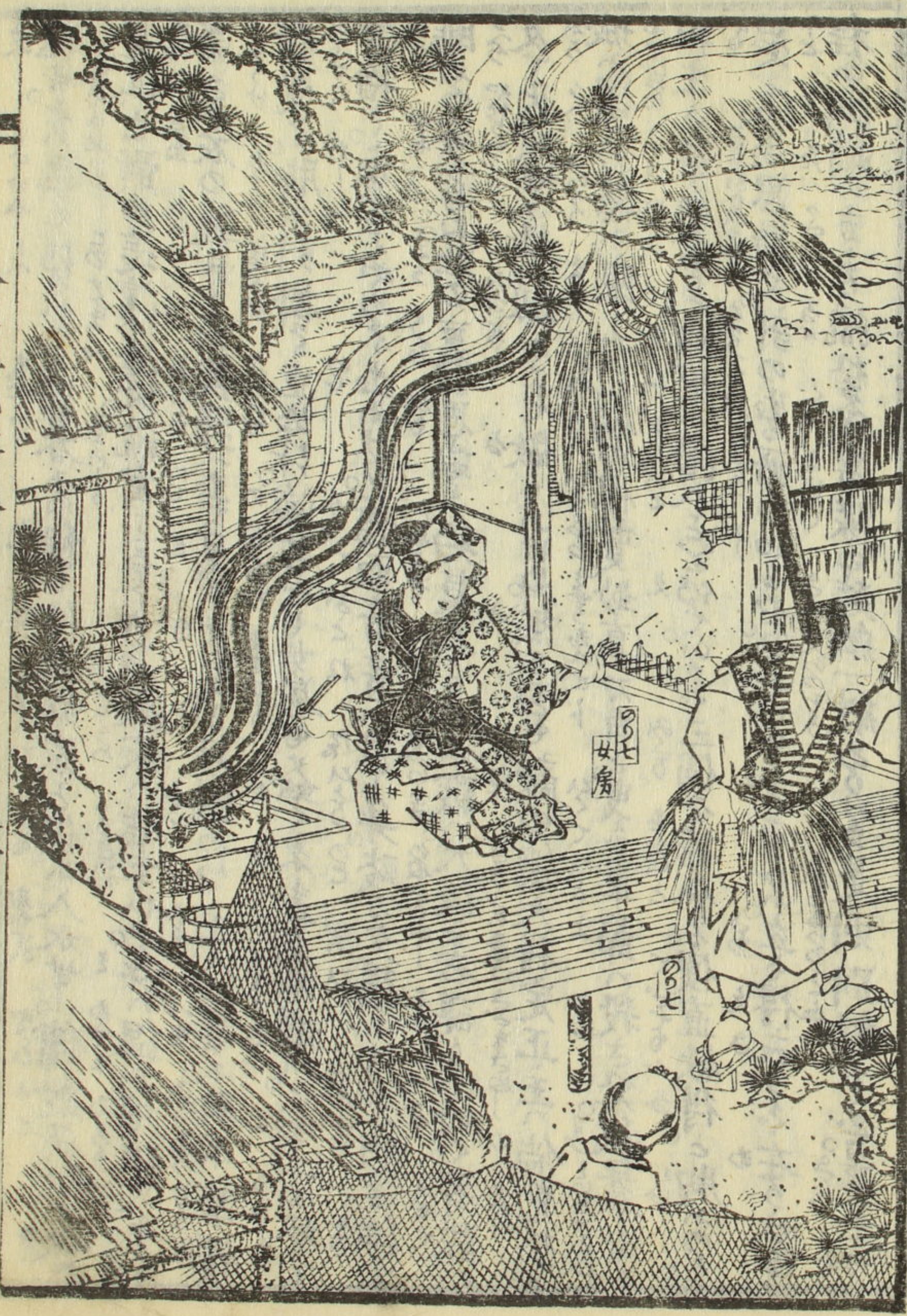
時ハ千刃の海の底に届くと。貝採技を生活せず申斐の沈む元自溺せむ。命を涯く暴波を凌ぐ。潮水を呑されしを。避生りて恙もるけれ。御京の媼内ハ那隨。這頭で命終る。地方の厄會を交す。徳をり。某少死する。今日ハ扇谷の管領様の安房の里見を攻伐の。水戦ある故。この這頭の船を威徴れ。漁獵技の便着る。比呂屏居て在ぬ。然る。徳を憶り。那里ハ媼内ハの介。見出た。一河の流を汲。一樹の蔭に寓。似る。咱の這大茂林也。浮屠家海苔

七と喚ぶ。老網漁で侍るか。是ハ一期の縁。この這頭。又來す。訪せぬ。結茶。夫婦。眞実。立。飯。若。復。長財。襖。解。粉。祿。の方。金。一。片。を。取。り。出。す。と。あ。る。聊。小。は。れ。る。命。拾。一。歡。喜。折。乾。も。見。ぬ。備。小。措。れ。る。敗。方。金。小。う。ち。載。て。卒。と。な。り。小。取。ら。れ。る。主。人。夫。婦。の。含。笑。も。あ。る。思。い。け。も。な。る。愁。な。る。の。宿。を。は。な。す。是。賜。り。何。お。せ。んと。推。辭。む。と。音。音。と。云。云。と。薦。め。て。敢。鏡。さ。れ。ば。海。苔。七。の。後。う。や。み。教。受。て。う。ち。戴。く。金。子。を。女。房。小。遊。興。け。り。左。右。を。程。下。下。晡。に。做。り。し。く。海。苔。七。の。音。音。の。み。や。う。媼。内。ハ。浦。河。へ。還。り。あ。の。又。上。總。へ。由。り。今。日。の。の。成。り。か。ら。今。宵。ハ。這。里。ハ。明。い。ぬ。身。昔。幸。ハ。延。喜。戸。を。一。里。有。餘。の。暴。波。路。を。洄。り。て。も。溺。れ。ざ。り。けれ。ば。腹。病。患。之。潮。毒。ハ。レ。ん。宿。ま。る。と。も。け。し。う。い。あ。る。と。ハ。亦。女。房。も。俱。小。留。る。懇。態。ハ。音。音。の。い。く。感。謝。ハ

八代傳七郎

古

大藏



大茂林
 海の音
 救音と



堪む。その忝くゆるか。尚暮る程もゆる。奴家と俱に入水甘。備舵工のふ做い
けん其亡骸の這濱邊に流寓する。奴家の倥幸い。身の温り地炕火あき。
帯さ衣の乾き。其頭へ出て見ると。瞞め。主人の妻。脚羊草履
借受。脚引掛立。海苔七も女房も。蚊く来ま。喃媪。と喚ぶ。雨聲を
夕捨。歩と。やめく。出ふけり。倥而音音。單身。残る夕陽。片光明。瀨を
眺め。安らぬ。胆の裏。思ふや。約莫。今日の水戦。大坂主の謀。如く。寄隊の
反て。火攻せられて。血。ふして。做らふけぬ。然も。敵の總大将。定正。王の備免れて。
城。還らば。怒。不乗。して。三個の保。質。妙真。刀。自。曳。單節。の殺。されん。我身。今。幸。
再生。する。甲斐。ありて。那。里。に。潜。入。と。を。ひ。て。二。個。を。極。合。便。直。欲。得。と。胸。の。も。
思。ふ。尚。思。難。て。計。の。劣。所。を。知。ら。ざ。い。ふ。せ。ま。と。な。り。ふ。立。も。得。去。ら。ず。在。り。け。ん。
程。洲。崎。の。方。より。流。れ。來。る。寄。隊。の。殘。船。一。艘。あり。是。則。別。艦。を。置。裏。高。

隊の副將。上杉朝寧の隊の從兵。他們の洲崎の閉戦。敗れて。朝寧。大。山。
道節。射。落。され。又。那。毎。印。東。明。相。荒。川。清。英。も。撃。捕。れ。其。他。の。皆。降。
て。道。節。允。さ。結。紐。を。命。を。助。推。流。さ。る。其。艦。を。あ。り。け。れ。殘。兵。約。莫。
三。四。十。人。あり。他。們。の。今。料。ら。ぬ。五。十。子。近。に。這。浦。の。艦。の。寄。り。に。飲。へ。も。身。の。背。
に。小。結。紐。ら。れ。皆。重。索。と。掛。られ。這。容。不。と。阿。容。々。と。城。の。外。へ。は。な。れ。艦。
より。出。難。ら。一。個。の。老。媪。の。這。水。際。に。立。在。け。見。出。一。身。兩。三。個。の。老。兵。最。
面。を。小。聲。を。り。て。喃。媪。に。汝。の。這。頭。の。者。ぞ。我。們。の。今。日。の。水。戦。敗。れ。て。
敵。の。為。に。生。拘。られ。と。辛。く。も。脱。れ。來。れ。る。れ。も。皆。這。儘。老。五。十。子。の。大。城。へ。還。
り。か。り。の。這。索。を。解。れ。と。瀧。の。音。音。見。え。て。お。料。ら。る。便。宜。を。得。り。
と。思。ふ。心。と。色。あ。ら。ぬ。艦。の。邊。に。入。立。寄。り。左。見。右。見。の。合。笑。て。開。解。と。解。
べ。れ。も。尚。連。累。と。せ。れ。ぬ。祟。も。あ。ら。ず。争。何。の。見。と。候。る。を。大。家。の。事。と。否。と。何。

らちの祟ゆらん。今我々が這索と解くと上小忠節を異日賞禄を賜ふべし。疑
いで解たぬが。存まらんと。音音の胡意従ふ。異日の賞禄を何せん然
らぬ奴家の情願あり。獨女と五十子の大城の奥へ炊妻不あせむる。他が上心
許る。奴家も俱して。今其索を解き。老兵を推辭むを音音の冷笑ひて
要の事。敗軍の我々が老女と俱して。と推辭むを音音の冷笑ひて
あつた外を馮心ぬぬ奴家の退然然ふ。との捨て立去らむ。と大家ややと喚
停。開を短慮之領て。ゆるん。疾せんと。と求ま。音音の猶も。艦の纜
會。延て。汀渚の松小結び。留れ。残兵。動揺々々。艦より。立つ。程。音音の
先。兩三個の索と。多。解捨。解れ。老兵。甲と。解け。乙も。亦。解れ。解れ
つ。各。各。面。多。自由。あ。り。け。登。時。又。老。兵。あ。り。約。束。され。這。盟。を。伴。ふ。か
わ。べ。く。然。れ。も。這。儘。一。俱。と。あ。る。と。許。さ。る。艦。中。戰。笠。眩。看。脛

衣。中。那。と。男。装。さ。せ。黄。昏。時。あ。ら。ち。紛。々。俱。大。城。入。る。看。外。若。者
る。あ。べ。と。ら。を。大。家。諾。る。い。と。躬。て。音。音。小。身。甲。さ。せ。且。戰。笠。を。戴。せ。後。ら
見。つ。前。より。見。つ。通。雄。々。武。者。態。る。哉。物。足。ら。ず。我。們。も。大。刀。器。械。を。敵。に
捕。ら。れ。腰。空。し。を。争。何。せん。只。識。と。戰。幟。を。照。驗。す。名。告。を。せ。必。城。門。を
開。れ。い。を。け。と。散。動。め。た。音。音。と。後。方。小。立。せ。五。十。子。と。投。て。走。り。け。り。有。恁
程。大。飯。毛。野。亂。智。の。洲。崎。の。澳。の。水。戰。敵。船。を。火。攻。し。て。躬。方。全。勝。る。け。れ。は
猶。五。十。子。の。城。を。按。て。妙。真。曳。の。單。節。を。拯。ひ。令。ん。と。逸。早。く。其。隊。の。頭。人。小。森。但
一。郎。高。宗。千。代。九。圖。書。介。豊。俊。浦。安。牛。助。友。勝。木。曾。三。介。季。元。等。と。五。十。子。の。雄。兵
一。百。餘。の。快。船。を。順。風。小。儘。漕。走。る。波。上。自由。を。疾。と。宛。月。の。免。の。流。を。逐。ふ。異
る。下。哺。あ。る。時。候。大。茂。林。浦。小。來。み。けれ。船。と。水。際。へ。就。さ。る。と。見。れ。磯。松。小。維
ま。る。一。箇。の。戰。艦。あり。原。來。那。孫。火。を。免。れ。敵。兵。又。強。く。逃。去。り。て。這。里。より。城。へ。還。る。見

と思ひつ化と前面に見れば那殘兵のあらまらん三四十個の仇武者毎五十子の方へ
 集ひあつた。他們の必這艦より出く城へ敗軍を告んと急ぐるを猜し高宗豊
 俊を招き寄り意表を示して計策を授け高宗豊俊を導く其隊の雄
 兵二十名と俱那艦を棄置せし敵の登識と戦艦を手手合り身あ着く
 岸へ登り那殘兵の後を跟々中程既中て黄昏なり且朝寧の殘兵們の去向を
 急げ見ゆる者我東より交る敵ありとも知ざりけり却説件の殘兵們の俱
 五十子の城のまう正門の橋を立集合く聲高く喚るやう什麼御内人達ふの
 稟は是の安房の水戦敗れ辛く脱れ來る副將軍と名々の御隊の兵ある其
 甲某ひ等て火火急の注進ひを又蝨く御城門を用ひて異口同音呼門の這里を
 守る城兵們のうら駭驚たり狭懐より其毎の形狀を差覗く御方の戦艦を立識と
 身あ帶る者も多し且其名告る姓名も皆是相識る同士のれ黄昏るれも毫も

狐疑せし這隊の頭人菲見利金太士卒下知して正門を角門を用ひて那殘
 兵們のいもれ之音立も俱内へ入る背に従ふ高宗豊俊隊の二十個の雄兵を推
 續々相入りと瞋昏るれ誰も他も外る者もるける當下件の殘兵們の老兵を
 前へ立せし跪つた方開が中老兵も面を利金太に向ひて思ふも似ぬ
 今日敗戦御方の及て衆艦と敵火攻せられ誰一人も免るな副將軍を皇
 見防衛使大山道節射て落され千尋の水底に淪とみぬ然れ那隊の勇
 士も火を焼れ水溺れ然るれ敷れ生拘れ免る者あるとるり開が中老兵可
 毎の堅を摧れ鋭と劈れ大刀器械も皆折られ免る者ありとるり開が中老兵可
 漕退け惜るれ命と有りいりやを御留守達不告稟えと思ひ只副將
 軍の老館の不在火水の不亡の欲撃れれ欲知るより敵の
 必勝不乘り逃るを拜々長く驅て當城を推寄るなり御用心ありと詞意迫

多く異口同様に示合せ已が非と飾りて俱に訴れば城兵等が驚れ又かゆるに非見
 り金太胆と淡しつ暇むが像く眼を睜りてそや安らぬ事かをわれ疾箕田殿が告
 知し諸門の隊配り要緊するんとその士卒等心得て走りて二の城門三の城門諸
 隊も急を告ぐ當城を與り守る箕田取蘭二圓通等孰も駭噪さるる敵の
 旗も不見きて落支度とる者もるりしと取蘭二罵勵して其隊の小頭人們と
 共侶不出で隊配を倣せ程小城中猛可放火者あり守屋より其火發りて又
 城樓も燃移る烟裏小敵兵あり其兵幾人多し知を胡歩乱行々城兵們を
 中る小儘せて斫付き刀尖鋭く聲高や若們知むや里見の軍師大阪毛野が
 先鋒の頭人小林高宗十代九豊俊あり在りあり在りと名告被け相喝りて
 四下と靡るる大刀風不暗さる烏り城兵等ハ敵の多少を知らざれば右往左往迷
 ぶて敷る者も多りける當下里見の士卒們威く正門をうち用る守屋の邊りふ

敷る馬の絆と斫断々々馬三頭牽出し高宗豊俊も跨まれ残れる馬も
 灼り怖れて正門の橋と葛直に渡して遠く馳去れ城兵の度々失を頼れ鬼
 正門より逃る者も多し這隊の遂に敗れける浩る処大阪毛野胤智の浦安
 友勝木曾季元と共に三子有餘の隊兵を率て那残兵の迹を跟り五十子の城に
 近づ程小城内猛可息劇しく忽馬として起弁る兵火と俱に城のくより放馬二
 三頭這方を投て馳來ると毛野の先鋒の士卒も下知して馬を提駐させ
 躬て其身と友勝季元等の騎馬もあつ諸兵を勸め短兵急推寄て城の正門に
 乗入るに非見利金太隊の兵母も防余由る第二の城門に某を敵と柱けり是
 より先は烈婦音音ハ那残兵ありち交りて斬く城入り一時日既暮るれ躬方の
 頭人高宗豊俊が二千個の隊兵を領て紛れ入りしときぞ知れどいさ妙真豊の單
 節の在処を索ひて極む便りも欲得と逸早く紛れて深く潜び入て這里那那里

飲とまふる程不城兵猛可罵謀ど敵既逆寄し正門の剛才攻捕られ那頭
人へ名不ゆをて安房の軍師大阪をて然てこの城保ちとけ宅眷を敷もさる疾
退らると叫び東西へ走る者のとまられ言問ふくあきらけの音立音の奥へ紛れ
入る程不給事の女房も良賤尊卑の差別を外面投て感ひ苦し某を殺す
見々問々遣違して猶奥深く入る途不迷する眉尖刀一挺あり是究竟と合場て
披もつ立ち奥の間小男女争ふ聲去け原る不這城内河堀殿と喚做す定正の
継母ありけり年輪六十許多し又式部少輔朝寧の妻と親姑姫と喚做す是
此京師某甲中納言の息せりいと定正近曾と下して朝寧を妻せける今茲の
十七八ふもあつて間嘗不深慮はして立と死の蘭奢衣裳不董り臥と死の枕終を
褥中て冬の夜も猶暖く夏の日も将涼く切ぎ錦の上花を添る樂不耽れと雪
中不炭を贈る貧民の情を知ら三食の掛を列ね桂を薪し玉を炊く幾の侍

妾前不仍の後不從不任る富貴の身やあを今城陥り圍破れ敵乱入ると時を
恩顧の老黨傳給の女房も何里もけん在るとるけれ河堀殿と親姑姫の如もゆき
うら對ひくふふいせんとさるふせん術知を共侶うち泣て在甘不城不兵火係りぬ
りく左ても右ても免れぬ死命を今ゆ惜んや只この儘不刃伏て死天の逆旅の相伴
んとく短刀合揚て念佛唱る兩聲も細るむろの歎をあら俱不刃と放そ
既不かつよとをえりける有悠一程不妙真鬼多單節多八裏不這城内不保實捕
入れられて奥在る一室不存の身の憂多し小就て亦心不かる立日喜が上とつらくと思
の然一人不問難て做す事も早く早一暮を程不日黄昏時不及び城不中猛可
噪だ起て里見の軍師が逆寄して正門既不破れらると罵る聲のとせや言這保
實不守の頭人大石憲重の家臣もける那朝時技太郎天品餅九郎多の如
雑色奴隸も咸逃去け其頭不人の在るとるけれ妙真鬼多單節多の一びわら

驚に一ひの勢い思ふ顔と集めて。安危を計るも鬼の軍節が如き。如く今日の
 関戦御方の全勝疑ひも。大阪主の逆寄し来て。城を攻落せしむる。今も然る
 我身の出入路廣くをりし。妙真點頭て然し。我の左に右に。這城内の
 河堀殿と吸れぬ。定正の奶々君も。及朝寧主の夫人も。親姑姫も在る。
 妙真這兵乱ふ。那二柱の老夫人新夫人。我の館の御仁心違ひし。後
 後の為す。非如案内を知む。情地不後堂不赴。那方様も俱し。まのせで大
 阪主不渡し。我の質不捉れ。這里不存ける。甲斐のわん。あつて。何ん
 白單節の飲ひ来て。現其進退奇妙。時後れ。悔多し。誘ひて身を起せ。
 妙真も俱不裳と。幾間も。奥奥坐席と。其首欲這里。安ん入る程不翠
 簾帟渡せ。奥の一室不果して。兩個の夫人存り。問でも。那打扮貴人多く。是
 うが。送し短刀拔持て。自殺せむ。あつて。那時遅し。這時速し。妙真鬼の軍節

光景を見て。忽地ヤヤと聲を被けて。走り入り。右ひきり。巻物推り。推
 禁れ。河堀殿も親姑姫も。吐嗟と。駭れ。猿馬を鎮め。左見右見て。思ひ
 汝の抑是。何人ぞと。訝り。問れて。妙真。猶も。放さ。答る。識せ。理り。
 奴家毎の里見の家臣。大江親兵衛が。祖母妙真後の十條力二郎。尺八が。母鬼の軍
 節を。他。姥雪代四郎の妻。音音と。俱。軍師。大阪毛野の。策。策。従。従。
 降人千代丸。圖書助の。舊臣。甘木甲第の。宅眷。と。詭りて。密使。不。卒。我。我。三。三。名。名。
 保賃。と。這。城。内。留。措。れ。音。音。仁。田。山。晋。六。預。け。られ。開。分。儘。艦。不。送。の。不。介
 不。今。日。の。水。戦。寄。隊。敗。北。の。咄。え。あり。及。て。大阪。不。逆。寄。せ。られ。當。城。將。陷。んと。然。然。
 我。主。君。里。見。殿。仁。者。人。豈。人。の。城。と。屠。り。人。の。宅。眷。と。殺。戮。し。己。を。利。す。
 虐。を。あ。め。り。や。憶。ふ。今。日。の。城。攻。り。管。領。非。理。の。攻。伐。を。懲。さんと。欲。する。の。然。然。を。備
 して。自。殺。あ。ら。義。成。の本。意。あ。ら。枉。て。止。り。あ。ら。と。送。代。不。諫。論。し。て。持。る。短。刀

挑放せば河堀殿も親姑姫も其の小携りも泣いて原來是汝等と思ひける敵
方の間諜見せありけるよと事問ふ詞も果ぬ折る四下小响く空銃小大家耳を事れて
吐嗟とある駭つ俱お前面を信と見る隔の襖戸蹴用は見え出る兩個の猛者あり
是則別人るは亦那朝時技太郎天岳餅九郎をありける但見る打扮一對るは
身中肚甲肱鉞脛衣戰笠眉深小髯昨反らと訛聲高く喚るやう知れ是意
中人達豫の目目弄齟齬と館打負のひひ里見の軍師小逆寄せられて夙落城小
程もろ我情人達を擁護して且大塚の城小退れと思ひら索ねお見えざるを
故ありけれ奥殿入りも何事やら這里小造りて我々が主張亦更りて河堀殿と
姫上とのまごもゆやをきて這里在るの奇貨多る哉元自里見小降参りて這二
方を獻らせると咱も兩個の城の主小做らも易かべし丹七和女もと妻小して旦る
夕る小長視る鄙語小云牡丹餅で脣を打る栄曜の上装恁とる惡及とる

疾引立て一緒のるる備詩の語のと不の字といり可愛さ反憎さ百倍三人
敷き殺して然而余後小里見小降見應とも不とも女をもと兩聲俱小苛めく喉絶小暗
き準備の銃砲又響くもく念直と銃杪其方小推向れ吐嗟と駭驚く妙有と
俱小里見も胞姉妹其身を看小河堀と親姑姫と皆小戦れ聲慌々
登りも和主們のをも借りて這二方を俱一もわらせんや況筋多る不義臨奔矢
銃をりて權をも誰か枉て従ふ死といをも果む技太郎と餅九郎の脚踏鳴りて
眼と腫ら聲又苛ぐ女流小似ゆる大敵無敵其美ると思ひ知覚期をせよと
罵りて火蓋を鑽らんとせ程小後方小覗ふ一個の雜兵忽地聲と震立て白物も
と喚禁れ小駭馬見くる枝太郎が枝果敢多く眉尖刀小細項下とせられて軀小控
と小礼小是ゆを駭く餅九郎も俱小見くる程小もわらせんや只件の雜兵が小眉尖
刀小右の腕をならせとせられて持する銃砲共侶小忽撲地と雜落されて脣居小

八代傳七昇天四一

廿

八代傳七昇天四一



撞と平張り思ひかけたる今這幫助又うち救馬は且然と曳の胞姉妹は真の共
侶の聲をうけて料らうける危窮の助劍押身何人をも向ふ間小雑兵の戦笠
を脱棄するをこれ見れば是別人を以て正の音音をてあの日れあちくはかたはれ
真曳も單節の満面笑ひ顔先二口の短刀を鞘に納め身と起り多々
卒這方へと請薦於音音の眉尖刀搔遣りて跪け却りて奴家か修る打
拵と這城内小潜入りの特許以ありるれども升る後こそ告げらる既小躬方の
全勝を水路の閉戦の事も大阪主の一隊の雄兵當城の推寄きて正口の既小
敗れり告げれば妙真曳も多々いふ之れは安んじて原來事皆便宜小ゆり這果
在る雨丈人の定正主の妨々君と新婦君をさるるれ城陥りぬと告めしは自警
多々も程小我門料らうて小来てやうな合禁はけり折小那枝太郎と餅九郎が
乱を利と做さ小忠の本姓。刺奴家姉妹を挑むと火銃を以て權さる防小

術のあり小折りて身武者打拵多々件の人をも推果ぬひ今小筆武
勇の拵は愉快を修るれと告げ音音の恭しく河堀殿と親姑姫も向ひ額を
衝け奴家の里見の一家臣姥雪代四郎が妻音音を修り目今軍師大阪毛野
が當城を攻懲まるとも但君の側る每人を鋤除ん為の御達を苦めぬふは
必然れども這里小在りての軍兵の乱妨も測りがたふは權且御園へを誘ふと
薦言示其河堀殿目と推拭多々年来仕る女房們已が自然感逃去り有徳瀬小立
り者へるて反て敵の妻孥女見小伴れぬ鈍りさすうち託め親姑姫も只潜然と泣沈
も立難ぬを音音妙真曳も單節の尉めく却後園の那方小見ぬ余亭へそ
俱小けり姑且して給事の女房の聊忠心ある者十名許返り來り河堀殿と親姑
姫を去る小雑色とむが二入も斫殺され俯さる那二方の見えぬらぬら
驚れ且怕れて又外面へ退りけり小程小大阪毛野が先鋒る小森但一郎高宗千代九

圖書助豊俊の敵の頭人並見利金太門が逃ると迂々二の城門に士卒と馳て攻戦
 へ城の頭人箕田取蘭二兵頭細阪四郎布留川凌市かと裁せて隊兵を焚く
 ちと先途と防に戦ふ其兵四五千あるをりく左右多く攻も破られ毛野の馬上自定を
 見て弓の箭刺多く標と射る矢局錯るを取蘭二の肩尖丁と射られぬ堪む
 馬より落れり是を驚く城の士卒の備と乱と激と退くと透る細入先鋒の
 頭人高宗豊俊の浦安友勝本曾季元士卒と薦めて二七千一攻伏
 攻伏乱入る然やも烈した大刀風城兵防ふ力多く才小金塔児取蘭二の肩小旗
 々後門投て吐と頼れて逃走れ細阪四郎布留川凌市心るを逃走る躬方の
 士卒小誘引れて後門よりを落亡ける憊而大阪毛野胤智の一舉小城を攻落し
 馬を本城の乗入る敵一人もあるとなれば權且あ小屯して高宗豊俊を日てい
 我聞當城の定正王の後母河堀殿と朝寧の夫人親姑姫あり又妙真曳の單節の

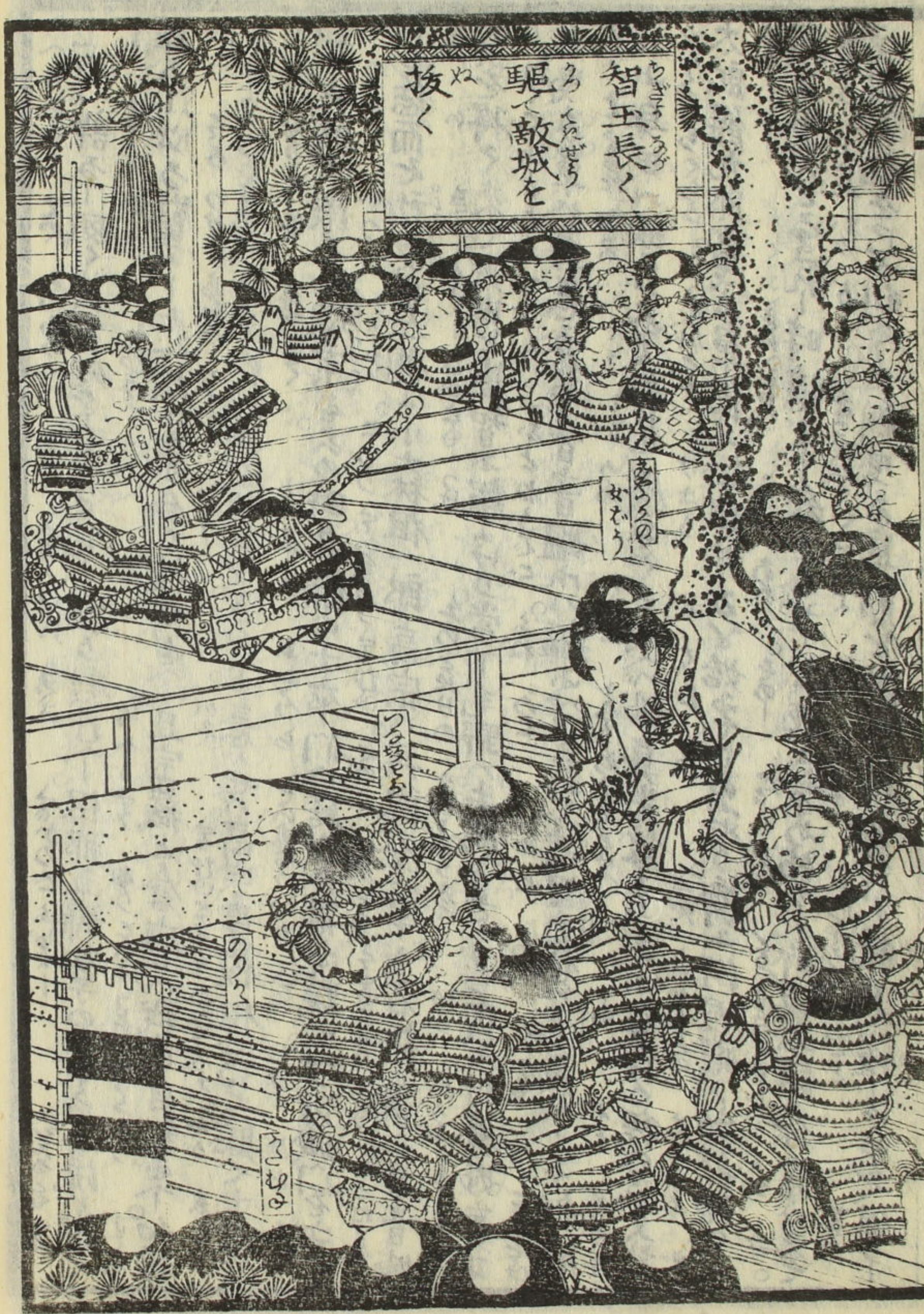
うへ心許り一夙其在外を密に宜く勅り慰むべし但五婦女子のまらぬ女流は都て
 罪を必る驚ろし一所小集合て扶持をべし且宝藏と倉廩ハ我々自封せし和殿
 們ゆよく心を属て士卒の乱妨を教言めよと急ぐ高宗豊俊相心めて馳て士卒を
 部して城中隈多く巡索をよの時自餘の士卒の庭上小旗を焼て二の城門を守り
 けり憊而を初更の左側は小本林但一郎高宗の其隊の士卒十名許と俱小音音妙
 真を得る來て來由と胤智小報まけり當下毛野の先妙真ふち向いて什麼妙真刀
 自曳の單節の恙多死や音音媪の艦小遠されて這里に在ら下と思ひし針脛
 衣小身甲へ故とそあらし甚麼と問へ妙真先答るあふ在りける程の又技
 太郎餅九郎が曳の單節不掛想せりと始て且ふやう櫛河堀殿と親姑姫の自
 殺まぬんとるこれ時憶も參り合せて其死を禁めたり折枝太餅九が索の來て
 主家の乱を已が利りて刺曳の單節を挑ち従ひされ火銃と權しつ之遍り



ノノ舞ハ舞卷四十六

共

文安堂藏



ハ舞ハ舞卷四十六

文安堂藏

程の料らばも音音の刀自の幫助もよめて人等と敷き果一の俱不件の両柱の
 御達を勅慰稟して園の茶亭も退りて一五十一と速知まれば音音の亦大
 茂林の澳邊を仁田山晋六が柴新船と計りて焼亡せし事の始も那身の海没
 正火を免れて酒にて大茂林濱に造り折海若七夫婦死を救れ事の趣を告げて
 又のやう折る扇谷の残兵の威結紐れて還り来ぬ其艦流れ寄る他を漫
 哄誘して這城内に紛れ入り身並不勇士達の推續にて當城に攻入りぬいと知
 ざりてこの刀自と曳る單節を索ひて救出さす思ふ故事紛れぬ後堂深く
 潜び入り今妙真刀自の告げあり如く件の兩個の女人を眉尖刀に被け其除
 河堀殿と親姑姫と茶亭も俱ら共侶不事の鎮ると俟ゆると報るを毛野の列々
 と听果て感して已まむ憶さむと拍鳴りて果さる勇婦の進退孰れも忠義を
 ざらん做りて各皆妙河堀殿と親姑姫の喘りて自殺あるべ我両館の御仁慈

も徒事とるまふ長く怨を結れぬ那死を極ひまらせし時丁て其功後輩
 賞とべし我も見参まげれども女儀の夜分の憚りあり先後堂も返り入れて刀自
 宿直して是を備りぬ事の起本不保質も捉れ刀自の王と做りて及る兩個の
 保質と捕獲し不用意也造化精妙亦奇と縦定正王殘兵をのり當城に
 推寄来て復さす欲さると河堀殿を城樓に射して那罪と責て拒る我兵
 僅の百人なりとも他何ともまらざるといひ高宗と見ると守城の準備を示す折
 る千代九圖書助豊後の落後れる綱反四郎と庵人廩人們を生拘り結紐り
 雜兵も牽せ又當城に給事の女房十名許を捕禁めて腰索被けて得るま
 隨即毛野も報ていやう這者毎の迷惑も猶城中に在りて捕捕てい其姓
 名の箇様々と言詳に訴れ毛野も聞き鞠問する綱反四郎がいやう小可
 二の城門を攻破れし時河堀殿と親姑姫を杖出さると思ふふとて逃ゆるさ

らむ。這母と共侶の立願れて在りける。見出されて捕捕られぬ。又女房們も俱にお
 驚ふ。敵亂入らぬとぞ。時朋輩多と共侶の慌々走りぬ。かど御母君と姫上と俱
 走らぬ。せんと思ひ。わが我門十名の立離れて後堂へ還り來りける。二方のをりまき
 斫れ。兩個の雜兵の屍骸ありけり。怕れて又外面へ走りぬ。猛者連も逃れて捕へれ
 ば。とぞ。陳をぞ。毛野の听り。點頭て。あま。是の男。其田取蘭二門の
 立勝り。聊忠心ある者。俱に縛の索を釋して。妙真立音音。豊多單節と
 相共の。兩個の女君。仕へ。其頭人の浦安生。二三百の老兵を従へ。宜後堂等
 へ。但細阪四郎と廩人們の事。猶思ふ。われ。を儘。して屏居め置られぬ。よの
 餘の事。の。言送。も。宣示。せ。友勝。の。妙真音音。と。俱に。女房。を。受合。て
 老兵。許。す。從。へ。の。後堂。へ。赴。け。豊俊。の。又細阪四郎。と。廩人們。を。并。儘。に
 隊の兵。毎。季。立。ま。そ。外面。投。て。退。り。の。倦。而。當。晚。子。二。刻。左。側。小。溪。目。堅

宗の援岡猿八。鮫内葉四郎と俱に毛野が進退に従ひ。既去向を知り。とぞ。
 生口大石憲儀と隊の者。毎季。廿五。子。の。城。小。來。り。け。れ。毛野。の。則。城。の。正
 廳の局の内へ召入れて對面を。登時。堅宗の。嚮。河崎。矢口。の。間。河原。を。定正。主。僕
 僅に二騎。道節。が。虎。口。と。道。れて。那。里。小。津。り。と。討。め。折。目。の。伏。兵。一。度。小。起。て。天
 場。小。侍。小。走。り。小。定。正。主。僕。の。悲。を。請。て。言。果。べ。く。も。あ。ま。れ。則。主。僕。の。願。ひ。任
 せ。定正。の。自。前。て。首。級。小。換。る。頭。髻。を。受。合。り。命。を。允。し。且。事。の。照。驗。の
 為。小。憲。儀。と。領。て。來。り。故。小。定。正。中。鮫。内。葉。四。郎。小。一。百。個。の。隊。兵。を。分。ち。他。を。送
 り。と。報。小。葉。四。郎。の。又。巨。田。助。友。が。快。船。を。乘。り。折。り。來。ぬ。小。逢。り。か。則。助
 友。が。と。小。任。し。却。定。正。を。那。隊。小。遞。與。て。河。崎。小。か。り。來。り。堅。宗。と。一。隊。小。わ。り。け。れ
 事。の。趣。を。演。述。す。又。堅。宗。の。間。諜。見。の。く。夙。知。り。け。り。道。節。が。一。隊。と。り。定。正。を
 趕。敷。り。折。巨。田。新。六。郎。助。友。が。僅。に。五。百。の。隊。兵。を。り。道。節。を。防。池。戰。ひ。事。の

光景をうつる。隨ふ告ふ。當下毛野の儼然と憲儀。うち向ひてや。大石生和殿
親子の管領家の元老。小して其君と輔けての。賢良たる事と要せん。及
那惡の逢ふ。名非理の大兵を起させ。罪を隣國と畧す。欲はる故。十萬の
衆ありとのへ。小敵の敷を敗らむ。終ふ其君辱められ。其身を俘囚の做らむ。
是も我君里見殿の仁義禮智の心を。只其暴虐を防ぐ。今全勝の勢あり。
乘して人の地を畧す。人の城を捕らむ。我當城の船を寄し。只其惡を懲え。為
その故。小御我伏兵を。管領と矢口河原。綱龜。これ胡意。饒して虜の做させ。
是則我君仁義の本意。然も大職。那人を楚囚の做させ。と思へ。和殿
の美を知り。やとのれ。憲儀答ふ。由る。黃髮と嘗て。啞子の像。口を合め。
眼と睜り。のち。竟る。姑息。と聲細く。軍師我實の罪あり。枉て放
免を願ふ。と勸解。毛野の小溪。目。倭々と分付。却憲儀を牽立させ。

そが儘獄舎へ遣り。倭而又毛野の小林高宗。小談む。我憶ふ。大石が天
塚の城を守る士卒。管領大く敗北。當城の敵を捕れ。傳へ。必や
駭怖。城を棄て。走るべし。然らば。那空城を我より。守らむ。野武士山賊の
寓者。あゝ。和殿。木曾。助と共。侶。一千の隊兵を將。夙。那里へ赴く。
箇様々。相計ひ。た。具。ある。高宗。其。美。義。の。由。
但。大塚の城。より。忍。岡。を。要。緊。る。あ。の。美。誰。何。と。請。問。へ。毛。野。を。亮。介
と。ち。大。然。る。忍。岡。の。城。の。道。節。を。捕。る。や。あ。む。御。前。大。山。の。定。正。主。と。追。伐
あ。巨。田。助。友。が。援。兵。を。柱。られ。遂。に。敷。漏。せ。し。あ。む。然。る。今。當。城。を。我。逸。早。く
援。だ。れ。大。山。必。性。起。て。忍。岡。へ。推。寄。て。那。城。を。捕。る。る。べし。介。ら。那。里。の。敵。城。の
他。に。讓。ら。ず。思。ふ。木。曾。生。も。這。意。を。俱。に。大。塚。へ。推。寄。り。當。城。の。敵。の。棄
置。せ。る。冷。飯。処。々。あ。る。ん。腰。戰。飯。を。送。る。べし。と。急。せ。高。宗。奉。元。敬。服

八二傳山昇英二四二
九

きて。當晚一千の士卒を將く。悄地小城を立出く。大塚へとくいを死けり。介間小大阪
 毛野の今日の勝軍の事の趣を洲崎の御陣へ告稟させんと。枯筆を召よせて既ふ
 其美及ぶ程小雑兵等が炊た果る。戰飯を薦めると。左右も程小天の明け
 正門を衛る士卒等が。案内をたぐひ。大法師の谷山より出て來ぬ。いと驚えり。毛
 野のみが立迎へ。上坐を推し。且那奇風の大功を稱賛せり。大の秋は氣色を
 愀然として嗟嘆お堪む。姑息して。軍師昨日の勝軍は是賀ま。余も似れども我
 年來の出家の功德の竟る。墮獄の悪趣お作りぬ。抑昨日の火攻お敵兵の焼死
 せし者幾千百ある。けむ秋憐む。死にたりま。甲由も奇王を。七風を起せ。我罪
 重る。己る。と怨むるを毛野の听り。慰めて師父の自誼。然る。と。裏中論
 稟せ。て。悪を懲。ま。佛の方便時宜。よ。て。殺生も。反。佛意。お。叛。さ。は。師
 父の大功仰ぐ。小子今快船を。洲崎へ使を。ま。せ。と。師父を。載。て。送。下。

先齋を。ま。せ。の。連日山勢の疲勞を。整。し。の。と。解。れて。大の。領。く。の。麻。の。薄
 黒の法衣。袴の淨衣。垢。漆。し。脱。更。も。甚。丸。繰。る。數。珠。の。外。お。所。作。も。な。り。ける。恁
 而。主。客。の。早。饒。果。て。毛。野。の。鏡。内。葉。四。郎。を。身。邊。近。く。召。よ。せ。て。海。へ。大。師。お。俱。
 七。八。個。の。雜。兵。を。從。へ。洲。崎。の。御。陣。へ。参。り。ね。り。去。向。の。水。路。を。快。船。を。下。却。言。上。の
 趣。の。箇。様。々。と。宣。教。す。呈。書。一。通。と。定。正。の。頭。髻。と。宮。小。藏。の。自。封。と。遞。與
 せ。り。葉。四。郎。の。あ。ら。ぬ。果。々。事。の。准。備。を。做。を。程。か。大。又。毛。野。お。問。て。谷。山。お。な。り
 本日。の。且。大。村。大。角。の。又。水。路。躬。方。の。勝。軍。を。這。五。十。子。の。城。さ。へ。毛。野。が。風。く。攻
 落。し。と。那。里。の。風。聲。お。知。り。船。を。借。ん。と。思。ひ。當。城。小。東。由。を。云。云。と。告。る。と
 毛。野。お。別。を。告。げ。く。身。を。起。し。葉。四。郎。お。引。れ。俱。小。柴。浦。お。必。と。快。船。お
 うち。乘。り。洲。崎。を。投。て。漕。せ。け。然。り。又。の。朝。大。阪。毛。野。の。妙。真。音。音。浦。安

友勝等と案内あり。則後堂未赴して河堀殿と親姑姫を見参る。其事男女の
 禮を乱さず詮言所の定正の任人ふ惑はれざる。這回の軍旅の非を擧げて義成の寛
 仁を説示し且以て臣等當城無難を寄し敢殺戮を上目と云々あり。口官
 領の側を任人等を御除して両家の和睦を揣らむと然其間而御達を安房へ
 程しあらしむべけれども水路の風濤の恐れありまされれば猶も儘るもけうらわらむ
 這里小坊の妙真音音申す軍節の皆是忠信貞実なる女毎ふの御陪堂あり
 りる。その他年来給事の女房等も必御心安るべしと言町寧小尉めて是もの
 後朝々不安否と訪する事由り且生拘りの内中か庵人もあれは這者毎を釋饒
 多で庵厨の事と做さる。河堀殿と親姑姫の云々由生平易ら又妙真音音
 等が里見殿の仁心を言ふ觸れて説出で定正の愆を云々と論ふ。河堀殿も
 親姑姫も是よりして稍覺る。左も右も任人等の不忠を憎みひける。有徳れも毛

野の士卒小下知して城の四門を守らる。千代丸豊俊浦安友勝小漢堅宗後
 岡猿八号と頭人及小頭人とも介程小隣里近御る。御士豪民莊客們的里見の
 仁政と慕ふ者招さる。取取ひ来て請ふて軍役不達き欲する者千をのて數ふ。一
 およして大阪軍威の如く掲馬を草木由麻非く可る。次の日毛野の馬はうら踏り。二
 三百の隊の兵を相従へ。城外四境を巡り。民の訟を所定む。御の故老們尊
 食壹將木して飲ひ迎る。悠而多く日比と喚做を御盡処。一座の小道場あり
 けの前門破れ傾れて松の垂枝を掩れされども。鉦鼓の音近く響えて夕讀經の鼓耳
 ざるを御導人毛野小告てある。日比の宝傳寺と喚做したる。昔僧院を以て。這
 寺内。扇谷の一忠臣河鯉權佐守如の墓ひんとを毛野うち歩く。馬を駐め
 寺内を見入れて。原來是要ある人の墳墓なり。卒立寄く廻向をせん。この馬
 より下立ち。馳て找と入る程。士卒の都て鎧を建馬を敷糸。門前在り。二二の

老兵従ふ。玄関小唄門。一個の沙弥出て来て。うらむ。敬篤たる面色あり。左
 見右見。那野より。尋ねば毛野の自杖を向ひて。咱等は是里見の軍師。大阪毛野
 亂智之當寺。河鯉權佐公翁の墳墓あり。とぞ知り。拜奠の為。小立より。あはれ。いり
 案内を。馮心ひの。と。い。れて。沙弥の。何と。心へ。く。速く。又。内。入。り。ぬ。姑。且。て。向。道。延。と。
 浅青磁の香爐と。右。小。携。へ。左。引。提。て。復。遠。く。出。る。誘。と。む。り。小。庭。木
 履を穿り。先。小。立。け。れ。毛。野。の。引。ま。き。本。堂。の。傷。多。空。都。婆。堂。有。外。不。造。れ。け。れ。化。も
 丹楓も。も。り。ける。冬。の。柳。の。樹。の。下。小。只。一。塊。の。土。饅。頭。有。て。一。箇。の。空。都。婆。堂。と。建。之。處
 の。ま。ご。其。墓。表。の。石。中。に。是。る。ん。河。鯉。公。翁。の。墳。墓。多。と。そ。沙。弥。の。延。を。布。に。香。爐。と
 居。て。傷。小。立。く。懷。より。鈴。合。小。う。ら。鳴。り。傷。を。唱。念。佛。と。那。廻。向。を。七。和。助。け。登
 時。毛。野。の。後。方。る。る。老。兵。等。と。見。え。と。我。今。故。人。を。祭。ら。ま。欲。ま。る。小。猛。可。の。事。や
 祭。文。の。儲。り。文。の。花。之。言。の。実。之。只。方。寸。の。懷。ひ。と。述。て。誠。を。盡。さ。ら。亡。靈。も。受。ん

我。松。を。笑。ひ。み。せ。と。い。ひ。つ。親。を。改。め。墓。小。向。ひ。の。香。を。焼。き。跪。き。合。堂
 あり。聲。朗。小。吟。誦。あ。け。其。意。忠。信。や。て。那。死。を。悼。き。其。言。簡。約。小。一。く。那
 子。を。憐。み。誠。心。誠。意。よ。く。亡。靈。を。慰。め。夜。臺。の。眠。を。覺。ま。足。下。祭。畢。り。退
 け。沙。弥。の。又。先。小。立。く。客。殿。へ。案。内。を。あ。り。茶。を。看。め。ると。香。程。小。住。持。の。老。僧
 立。出。て。毛。野。小。對。面。一。く。姓。名。を。問。來。意。を。尋。ね。毛。野。又。告。る。と。初。の。如。く。且。の。い
 や。う。那。河。鯉。翁。の。咱。等。一。面。の。交。り。他。の。扇。谷。の。孤。忠。や。と。反。て。枉。死。の。悼。り。其
 子。孝。嗣。亦。是。忠。孝。多。も。反。て。奸。黨。小。誣。ら。れ。死。刑。小。逮。ひ。く。免。れ。れ。る。猶。幸
 る。て。存。亡。今。小。詳。る。と。我。今。五。十。子。の。城。小。在。り。民。の。眞。苦。を。解。き。欲。ま。知
 那。親。子。の。如。死。の。忠。義。を。後。世。小。傳。ま。の。あ。る。べ。く。速。小。墓。石。を。造。建。く。祠。堂。料。を
 寄。附。ま。べ。且。規。小。當。寺。の。頗。頹。破。小。及。び。宜。く。修。復。致。ま。し。其。財。用。の。形。の。如。く。明
 城。内。之。遺。與。ま。べ。あ。美。を。あ。ら。約。ゆ。ひ。と。言。叮。寧。小。解。示。し。硯。を。請。ま。り。自

證文一通を書寫りて取られ住持の歎け受攸りて却て其の實は御意の如く河
 鯉生の曩に枉死の折一旦城陥りて當寺の檀越するも其子佐太郎主親の
 屍骸を昇入れさせ安葬の爰を瀆れぬ則執置にひの菅領家へ憚りていさ
 不せき 墓石を建ざりし小里見殿施主小作りぬいて我寺をも修造する幸甚しくいられ
 仰せ 仰せらるるに依りて又其を看め果子と薦めて管待しけり。憊而次の日宝傳寺の
 住持の二の徒弟と從令五十子の城小あしければ毛野ハ則友勝豊俊等小件の書を言
 示して住持小幾東衣の金子を取りせめてゆく修造をせしめ守如の墓石のらる寺り程
 るく造り更て昔小あしるるのけり然に五十子の民母守如の枉死孝嗣の卒実の罪と日屬
 不平小思ひし毛野が是等の善政を歎きたるけり。ある是後の話説之畢竟大阪亂智
 が五十子の城を捕りて又道節が進退甚麼をせしめ又下の回小解分ると聽ねり。

南總里見八犬傳第九輯卷之四十六終

南總里見八犬傳第九輯卷之四十七

東都

曲亭主人編次

第一百七十八回

有種恥を雪ぐ郷黨を復歸せ
 大水陸小衆鬼を濟度む

是より先小犬山道節忠與と十二月八日の黄昏時候河崎矢口の河原小定
 正の援兵ある。巨田助友と較り走り折印東明相荒川清英等の意見小任
 せて故の海邊小退く程小馬淵場九郎が残兵及近郷多豪民の子弟毎
 が多く走り加りて既小多勢小作りゆく。姑且其里小人馬と憩へ。且當晩間
 謀見せり。五十子の城の虚实を窺せし。小那里ハ夙く大阪毛野が江を渡り來つ
 城を抜く威勢正小破竹の像く。當家の旗を四門小建て紛ふべくもわら
 との道節聞て且歎び且羞く。明相清秀等小の安ね又智叢逸早く

五十子の城を攻落す。有徳は我の大石が大塚の城を抜る。忍岡の城を
捕る。疾打立ねといそぐ。人火飽まて戦飯を使せ馬も多豆草を飼之。
九日の曉天の河寄ある海畔を立。陸地より菅弘大塚と投て推寄す。其
兵新舊うち合して三千餘名小及びける。徳而犬山道節は大塚の城近づく程
先二三騎の介候を遣して敵の形勢を知らせしめ其兵毎かり来て。那里の
城へ御方の士卒入替りて守り建てる。當家の旌旗戦幟多く見えくいと
報へる。道節も騎馬を駐めて呆る。半响許原末亦智囊が那里乃
城をも捕る。然りとて這里も来る。城を守り頭人等に對面せしめ
むさくもくとをりし。我ぬ馬小鞭うちり。既其城門小迫づく。隨小馳て一兩個の
士卒を走らせく。城の頭人小告り。小森但郎高宗木曾三介季元等其
虚実を問糾を小疑ふべくもわらざる。隨即門戸放開せし。道節をを迎へる。

當下犬山道節は三千の隊の兵を開き儘大塚の城外小住め在らせ。那身の
明相清英と僅小三騎士卒百名許を將。城小令高宗季元等對面して
當城を攻落す。其敏捷を譽へ且敵の落方を尋る。高宗季元も人
咱も。昨宵大阪主の指揮小ありて二千許の隊兵を將。當城小ら向ひ。這
里城守る大石が士卒等も管領昨日の水戦小ら負け。落く其往方と知らる。
利五十子の城へ大阪小逆寄せし。没落あるといふ。當城の頭人反橋
雜記丁田畔四郎等知りて。然てこの這城保ちが。敵小逆寄せし。同小
忍岡へ退きて。那里と一隊と做らむと。雜記の主の大石が宅眷小己が妻姫等
相添して第一番小城を落し。丁田畔四郎は三四百の士卒と俱小。各資財什
物を或ち車小載或ち馬小駝して後門より出去程小。我門風く推寄来く。
吐と嘔なく攻敵多し。然らば比是怯鬼小誘引れぬ。城兵等も孰も柱一柱も

柱もべに只雛蟻を散らぐ像く逃く四空ハ浴小做と一々我門も手も濡さ當
城を獲て守ふの事勿論那義ハ生拘の敵兵小少く所ありと告る故うち所く
明相清英憶ぶもうり合焚れく事の便宜と大阪の軍畧智計と感嘆も并が
中道節ハ連り小耳と敬けて。安果と且のいさう。現小兵々拙速を貴ぶべし久く
あて巧ると良とせば大阪が為す所ハ速小ハ拙かきむ。咱等ハ昨宵熱小中途
あり走加せぬ。兵毎小拘つらひて時後とぬる悔一さ。然らんハ又岡をも亦
大阪小先せられ欽といふと高宗推禁めて否とよ。又岡の城攻の事ハ。昨宵咱
等が薦めやかども。大阪主従とぞ。那里ハ和君小讓らんとぞ。士卒紛け伐せ
ぬ。然れば亦五十子と。這城内ある落武者の感忍岡へや集合け人然ハ那里ハ
大勢あるんと告ると道節又むむ。好々我あろひる。暇まうさと身と起せば
明相と清英と。又高宗と李元等小別と。告告と相従ふて留難高宗李

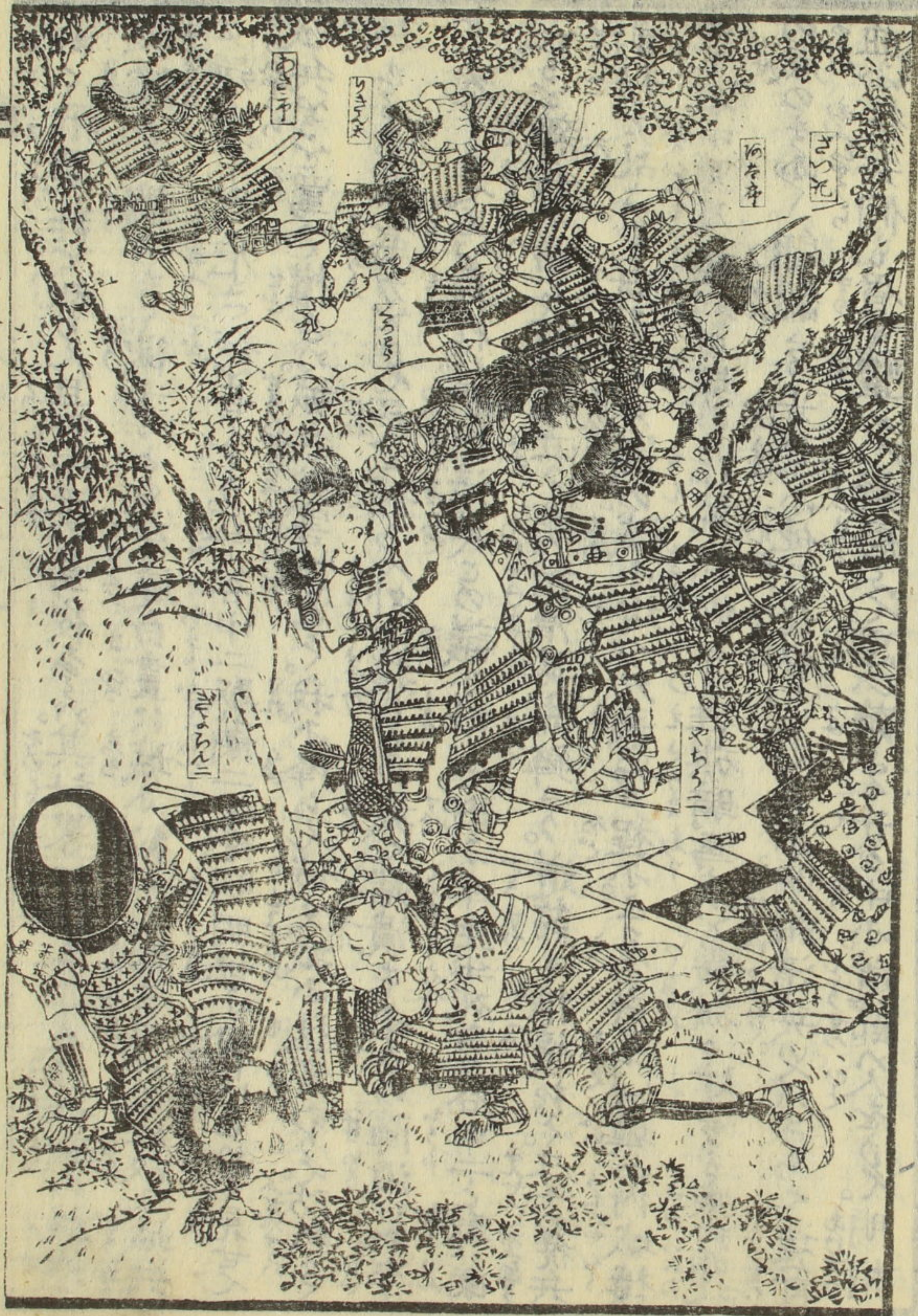
元猶も太向の小心を願ふこととむり小。門内まで送りたる。然れば亦大山路
節も。大塚の城を退死せると并が儘老兵士卒に意衷と示して。大阪既小忍岡
の城攻を咱等小讓らんといひと。各縦那城五十子大塚の落武者等がかりて。
幾千幾萬人肩籠りて防戦とも。今日我一時小踏潰さん各粉骨推身して。
我を佐けて大功を做しね卒とくといそがせ。明相清英ハのほろ之士卒咸諾して。
勇之其隊配小相従ふ明相清英先鋒たり。道節ハ中軍あて一二の老兵小頭人
を後陣とぞ。隊伍齊々整々と。不忍の池の那方ある。忍岡の城を投ぐるも。面々當日
礮川湯島の間も。森々岡山小く。処々小繫り拉す。冬青樹小路を去むと。
既小く大山が一軍ハ湯島城過らんと。あぬ時道節ハ馬より。去向と見
且と急小先鋒の士卒們と喚止めて。且宣示とく。我今前面の茂林を以て
小正ハ是隱々と。立升る殺氣あり。意ふ小敵の伏兵わらん疾獨出と。較す

捕りねと誨る詞も果ね折る。件の茂林より忽焉と威撃大く發りて撃出火銃の煙と俱小頭まわ。敵兵約一千有餘真小找む其隊の頭人烏革織の鎧小同織の五枚首甲の火形打を猪頭小被做し腰小大小二口の刀を跨ぐ馬を跳せ鎧を拵て四下小响く聲高やう小里見の葉武者們胆を潰しそ扇谷殿の御内少之忍岡の城の頭人根角谷中三麗廉這隊小在り先度の恥を雪まくも本事とんやと喚れ左右小從ふ西個の小頭人赤耳九二郎當場阿太郎士卒と駈く三七二小殺顔えんと競ふ。是ハ明相清英毫とも謀む徐々として士卒と找めて中と割せむ左右とも較せむ。道節も亦是と助けて息とも養む挑戰ふ左右の茂林の方よりして又起り立二隊の軍兵箕田馭蘭二韭見利金太布留川浅市甲乙三騎其兵約莫一千許道節が備の真中へ吐と嘔く推蕙る。道節謀む用合せて右小引受け左小拵て士卒と使ふ小手脚の像く毫も透間あてるとるはハ明相と清英ハ是小

氣とひくきと推く。閉戦陣ある折る。後陣のがふ又敵あり。是則別人ある。大塚の城の頭人及橋雜記丁田畔四郎が其隊の残兵四五百名と真先小找え。大山の後陣を撃て急るれば道節が其隊の老兵小頭人も皆駭死慌て返り合まる小暇なく。這隊より走敗れしは是小を敵の威勢を以て前後左右挿合せ。漏さるとぞ攻戦ふ鋒尖銳かりる。道節の物ともせむ。馬と前後小馳融し。又只左右小相中りて鎧りて敵と刺付も武藝驍勇向ふ小前る一人當千いとぞもある。犬士小誰う克つ者ある。箕田馭蘭二韭見利金太憶むの辟易も俱小深瘻を負し。其隊の兵們潑と顔れて風小木の葉の散る像く。鋒と倒るも逃し。六道節も又奮然と後陣の敵小突蕙る。本事小做ふ老兵小頭人取て返り刀を勦せ皆只恥を雪んと思はぬ者もある。勢小及橋丁田が五百の士卒の零時をわれ保難て逃んととる度と失ふ。撃る者を多りる。然バ又印

東明相荒川清英の時、根角谷中二赤耳九二郎當場阿太郎等の一隊と
 挑戦し、程小左右後陣の敵兵も威道節小撃破られ、立脚も多し、敵の
 頭人谷中元二郎士卒も俱小驚怖きて、呀と叫び、敗れ走る。明相と清英ハ隊兵
 を馳せ、攻伏多し、明相ハ根角谷中二小鎗を合せ、多しを疾し、馬より撞と突落し、其間
 小荒川清英も、赤耳九二郎と刺し、又當場阿太郎小を疾し、猶も雙て敵撃
 這壯佼等の拵死、躬方の勇え、後れんと、怖し敵の影と躲し、迹を埋る。闘戦風
 果、久し道節ハ開く、儘小馬を樹下小騎居、士卒の集合ふ、候程小、印東明相
 荒川清英と、生口根角谷中二を雜兵小牽せ来り、よの餘敵の小頭人赤耳九二郎
 當場阿太郎と、喚做と、兵毎ハ深疾小堪む死し、其首を捕むと云、又道節
 隊小生拘る、其田取蘭二ハ、深疾小く、あり、非見利金太布留
 川浅市反橋雜記、丁田畔四郎等ハ、或ハ敵を、或ハ逃亡、敵一人も、わび、り、當下

道節ハ、明相清英等、今日の拵を、答て且、い、我、田取蘭二ハ、五十子
 の城の留守居あり、又反橋雜記、丁田畔四郎ハ、是、大石ハ、兵頭小、逃、大塚より
 来、多、又根角谷中二赤耳九二郎當場阿太郎等ハ、則、忍岡の頭人、然、と
 五十子大塚の城の落武者等、谷中二と一隊小、做り、我、中途小、敷、せ、ハ
 所以、ある、を、猶、思、小、谷中二、間諜、を、り、我、去、向、を、知、り、情、地、小、城、を、出、
 這、頭、小、埋、伏、し、我、と、敷、多、く、欲、す、程、小、取、蘭、二、雜、記、等、兩、城、の、落、武、者、每、ハ、料、り
 せ、其、首、小、落、合、て、却、大、勢、小、做、り、た、る、と、又、ハ、明、相、然、と、答、へ、現、小、推、考、
 然、も、い、め、愚、按、ゆ、い、へ、ど、も、敵、の、遺、せ、し、碓、旗、戰、幟、わ、れ、ハ、開、せ、り、根、角、谷、中、二、が
 か、り、来、ぬ、と、伴、て、忍、岡、の、城、小、造、ら、ハ、城、兵、必、欺、ま、り、城、門、を、開、け、吾、と、容、れ、
 と、又、ハ、清、英、の、義、善、と、登、時、我、們、先、小、找、て、多、小、嘘、し、城、を、捕、へ、い、そ、せ、め、と
 薦、と、ハ、道、節、頭、等、揮、其、計、畧、反、小、あ、ら、ね、ど、根、角、が、殘、兵、脱、還、ら、ハ、城、兵



八代傳九頼卷四十七

六

○文漢堂藏



兵三え道
を城節
破の途
不残

八代傳九頼卷四十七

三

○文漢堂藏

蝨く我詭詐と知りん。且野干玉の鳥夜多る。其計畧行いよせめ。非如敵の旌旗
 戦懺り。揣らま。欲するとも。今這白晝に城小葺ま。面善見のる。故に城兵
 必疑ふべし。然危き技とせん。今谷中二馭蘭二等と明明地小曳吊ぬ。見せ
 城兵等と罵て權さ。城兵必害怕ま。我小降り。倘又城小猛者あり。防戦
 欲する。筋力と。是と捕らん。外小援のる。城之踏潰ま。小の障没む。卒
 ぬ。我れ。馬と我れ。明相清英の議小任して。既小半生半死。谷中二と馭蘭
 二等と雜兵小吊らせ。先小立。明相清英先鋒。道節も推續れ。三千の從兵
 前後と乱さ。既小く。忍岡の城小迫づ。来ぬ。程小と。正門の堀の内城樓
 の下小。中黒及揚羽の蝶の花號。漆做。方旌旗騎馬表と幾流。建。寒。西北
 の風のま。小。翻。光景小。他。甚。麻。と。小。明相清英。道節
 並小。從兵們も。肩と。擲。疑。惑。ふ。思。難。小。道節。人。を。明相

清英小い。今這忍岡の城小。躬方の旌旗と建。只是我を惑。敵
 の計策。然。亦智王。薄情。我を脱。技。風。這城。攻捕。且
 城小。向。名。告。喚。り。那。虚。実。と。現。ふ。小。明相。等。の。馬。と。正。門。の。橋。近。く。騎
 我。の。聲。高。や。小。喚。や。や。と。城。内。の。人。々。小。の。い。え。這。城。の。頭。人。小。敵。飲。躬。方。飲。あ。ろ
 ぬ。我。小。里。見。の。防。禦。小。頭。人。印。東。小。六。明。相。荒。川。太。郎。一。郎。清。英。是。之。這。隊。の。防。禦。使
 犬。山。道。節。主。の。武。勇。を。の。方。僅。来。ぬ。中。途。小。當。城。の。頭。人。根。角。谷。中。二。及。五。十。子。の。城。の
 頭。人。箕。田。馭。蘭。二。等。と。戦。ふ。且。疾。負。せ。生。拘。り。を。牽。せ。来。て。這。里。小。在。り。門。戸。を。開。く
 迎。へ。と。と。緑。返。り。呼。門。バ。城。兵。等。の。心。と。答。へ。先。扶。體。と。因。さ。左。見。右。見。る。と。半。响
 許。航。之。城。門。を。開。け。頭。人。と。お。不。武。者。葱。白。絨。の。鎧。小。鉾。鉄。打。釘。媿。頭。の。脛。衣
 穿。て。短。小。締。做。一。黃。金。製。作。の。大。刀。を。佩。た。頭。鎧。を。從。者。小。持。せ。る。士。卒。二。十。名。許。と
 從。之。遠。く。出。て。来。つ。る。名。告。答。る。大。山。主。那。里。小。在。る。恁。の。我。の。落。點。餘。之

七有種ふていぞと。報知せり。近づく程、小相と清英、豫知る那人、欲思ひつと、
 心かり引て道節、み逢され。道節、遠く馬より閃りと下立く。よら落點、一別
 以來、和殿、亦幾の間、小當城と攻落したる。料りざりたる。對面ふと、其所、以ま
 やしけと。向は有種、さい小可、出沒の言、一朝、小聲、うらり。先城内、俱は、はり人馬と
 懸へ、ひねと答へ、却、明相、清英、名對面、多勞ふて、引て、城中、小請、まは、道節、明
 相、清英、等と、俱、小我、入る程、小自餘、の老兵、小頭、人們、由、士卒、と、徐、小練、入、ま、三、隊、小別
 れ、東、西、小聚、ひて、乱、雜、わ、る。恁、而、落、點、有、種、へ、道、節、及、明、相、清、英、等、を、誘、引、て
 城、の、正、廳、小、造、る、程、小、五、十、有、餘、の、法、師、武、者、と、落、點、の、家、の、老、僕、小、ヤ、と、穗、北、の、故
 老、們、出、迎、へ、上、坐、小、請、待、多、賓、主、の、席、定、り、て、多、火、の、火、盤、と、鷹、め、且、煎、茶、看、め、る
 ほど、當、下、道、節、有、種、ふ、ら、向、ひ、て、昨、日、洲、寄、の、澳、の、水、戰、小、大、阪、計、畧、と、い、大
 敵、と、血、ふ、え、ける、ゆ、の、始、ゆ、り、道、節、が、敵、の、副、將、朝、寧、を、射、水、中、小、隊、志、し、ゆ、又

河、寄、河、原、小、定、正、と、趕、敷、一、時、巨、田、助、友、が、援、兵、の、り、又、く、來、ぬ、時、湯、島、の、り
 岡山、の、根、角、谷、中、二、箕、田、取、蘭、二、反、橋、雜、記、等、の、三、城、の、合、兵、と、聞、戰、克、て、谷、中、二、取
 蘭、二、等、と、生、拘、て、牽、の、と、來、つ、る、の、終、り、手、其、查、谷、と、説、示、し、て、却、落、點、が、上、同、谷、
 有、種、へ、笑、み、毎、小、感、歎、せ、む、と、の、を、と、る。義、成、の、武、德、仁、政、二、天、士、の、才、畧、武、勇、と、譽、る
 り、大、方、あ、る、を、小、可、が、上、へ、も、首、と、り、箇、様、々、々、尾、又、恁、々、做、り、と、言、詳、説、む、を、以、
 道、節、明、相、清、英、等、入、齊、一、耳、を、敵、へ、俱、小、佳、境、小、入、り、み、る。其、顛、末、を、尋、ぬ、る、初、落
 點、有、種、へ、扇、谷、の、討、隊、の、頭、人、箕、田、取、蘭、二、と、根、角、谷、中、二、が、身、勢、と、領、と、ら、向、ふ、と
 波、へ、時、妻、の、重、戸、が、諫、み、より、て、急、と、郷、黨、小、告、知、せ、て、穗、北、の、家、と、自、燒、あ、る、郷、人、と、咸
 相、伴、ふ、重、戸、の、叔、父、の、い、ま、を、か、り、け、る。下、總、の、國、後、嶋、郡、誼、夾、院、村、小、赴、き、那、小
 父、小、危、窮、を、告、げ、權、且、這、里、小、潛、ひ、て、居、り。抑、當、村、小、誼、夾、院、と、喚、做、し、一、座、の
 修、驗、院、わ、り、け、り。住、持、の、豪、荊、と、い、山、伏、也、昔、子、院、四、十、八、寺、あ、り、小、近、世、痛、く

衰く今山本のころれども。其餘波近郷小在り。皆半僧半俗ゆく。武藝を好む。且
 各々耕一耘りて。の口と餉へども。尚本山の事わつ時。四十八院咸集ひて。相資けどと
 のいとも。況ん豪前法印ハ其性拙小任使小法師小似げる。腕扱るれば平生小
 弱れと助け。強き級折れ人の不平と解ま。然る今落船夫婦が寛家の為小地を
 棄家と焼死宅眷を携へ郷黨と相伴ふ。情地小あ小尋ね来り。事の難きを告
 知せ。其資助を憑。一々豪前ハ推辭氣色。最精悍。官待。落船の
 宅眷ハ。楳北の郷人。子弟。西東小潜せ。是を舍藏。五
 六角小做り。比忽地。扇谷。定正。里見。と攻伐のゆ。内。頭。定。と。兩。旗。小。且。諸
 侯を連ね。兵を合せ。水陸より。ち。向ふ。と云。大兵。約。莫。十。萬。餘。騎。陸。行。德。國。府
 臺水路ハ。安房。の。洲。寄。と。投。攻。寄。ま。る。と。風。聲。あり。其。言。子。血。浪。る。と。され。ば。有。種。之
 驚。驚。憂。ひ。て。情。地。小。法。印。豪。前。小。意。衷。と。示。し。と。談。む。り。里。見。殿。ハ。裏。小。我。義

父水垣夏行翁の老病小臥。折東西賜。恩惠あり。然ら。彼。父。士。ハ。咱
 等。幸。小。二。面。の。文。を。辱。く。と。并。中。小。犬。山。道。節。忠。與。ハ。原。是。煉。馬。の。殘。黨。と。六
 我。舊。君。豊。島。殿。と。同。宗。の。家。臣。なり。た。故。小。曩。も。那。大。士。の。每。幾。番。我。小
 薦。めて。里。見。小。仕。へ。と。い。え。れ。り。と。も。其。比。水。垣。翁。の。老。病。を。看。放。ち。り。且。公。羽。が
 因。發。相。傳。の。田。園。と。棄。て。他。郷。へ。移。ら。ん。の。本。意。を。祿。ハ。い。ま。果。さ。ら。り。け。り。小。幾。程。も
 多。福。鬼。起。り。と。楳。北。を。棄。て。走。る。時。い。と。安。房。小。赴。き。大。士。小。就。て。里。見。殿。小。仕。へ。と
 人。の。一。介。と。然。し。も。一。介。の。功。も。あ。ら。ぬ。身。の。措。処。あ。ら。ぬ。安。房。へ。い。え。ん。と。さ。す。と。竟。小
 這。地。小。来。つ。る。り。今。里。見。殿。小。大。敵。あり。危。窮。存。亡。の。秋。と。告。ぐ。報。恩。此
 義。小。及。む。と。い。ふ。勇。士。の。本。意。と。さ。す。と。次。に。身。一。臂。の。力。を。勸。し。我。を。助。助。て。軍。功。を。立。る
 と。と。い。ふ。を。め。其。功。を。り。里。見。殿。小。仕。へ。と。二。小。家。を。起。さん。這。義。誰。何。と。請。回。ハ。豪
 前。つ。り。と。听。り。莞。然。と。う。笑。く。和。殿。の。情。願。極。て。佳。里。見。殿。ハ。賢。君。小。且。仁。政。の

先向謀見をのり。寄隊の来方を撈るべく子院の甲乙穂北の郷人を召集へ他等が
 意見を交べし。次の日件の毎を招鳩りて。か美と告て意見を同ふふ。大家死を
 資んとて。各神水を啗り誓を考る。悄悄地軍陣の準備を做せ。程の十二月の初旬に
 なるぬ。その時豪刑が遣したる。間謀見かり来て。寄隊の来方を報ると。少く小陸
 地へ國府臺へらち向ふ寄隊。西大將ゆき。如此々々。又里見方の義通君を大將ゆき。
 犬塚大飼防禦使より。又行徳口へ如此々々。洲崎へ筒様々々と。二所西敵の交を
 交ぬ。隨ふ報みより。登時有種の家刑們に談ぶるや。今我義旗勤軍の届る
 所洲崎ハ路遙ふし。事の急小逢ひが。行徳國府臺へ便路ふ。且遠くを
 就中國府臺へ寄隊數萬の大軍ふ。頭定成氏西將をも。況も里見方の義通
 君大將ふ。犬塚大飼防禦使をも。這隊ふ。就て軍中を盡さん。然らば。事をいそぐ

たるふ不慮の軍陣を故ふ。左右小東西整へ思ふ。似む日を過し。十二月八日の早天。小
 有種。并法印豪刑を西頭人ふ。四十八院の山伏穂北の郷黨を。子院小至。は
 壯る者二百五六十名。甲冑器械。延席小裏。と。各々是を搭駝。國府臺を
 投ぐ。いそぐ。あ。路近か。お。時。程り。た。の。日。中。の。左。側。小。國。府。臺。の。近。村。小。来。て。は。ふ
 隔。昨。日。より。の。開。戦。小。寄。隊。ハ。酷。く。も。負。く。今。日。も。山。内。許。我。の。西。將。ハ。落。て。は。は。れ
 たる。敵。一。人。も。わ。さ。さ。る。ぬ。但。里。見。の。防。禦。使。の。ま。ご。當。城。小。来。と。の。小。其。言。疑。ふ。と
 なる。終。有。種。家。刑。の。六。は。と。這。隊。の。僧。俗。忽。地。小。望。を。失。ひ。果。れ。果。て。い。ふ。ふ。せ。ま。し。と
 うち。相。譚。ふ。有。種。一。霎。時。沉。吟。と。開。戦。既。小。事。果。て。今。は。城。小。參。り。て。郵。語。云。開
 諒。の。後。の。棒。三。味。只。胡。慮。小。做。ら。ん。の。を。因。て。憶。ふ。小。寄。隊。酷。く。も。負。く。往。方。の。知。を
 做。り。し。の。小。約。莫。豊。鳥。小。在。る。所。の。敵。の。城。ハ。士。卒。咸。耳。怕。と。脱。路。を。見。る。る。就。中
 忍。岡。の。城。の。頭。人。ハ。我。郷。黨。の。怨。む。根。角。谷。中。二。麗。廉。と。も。他。小。貪。む。く。飽。と。も。く。

民を虐げて罪を殺せんと大魚の細鱗を呑ぐ如く其惡甚其田馱蘭二と伯仲之
先や今宵那城を攻落して谷中二を生拘へ大塚石濱の西城の攻むとも必落んとの
先什藝と請向へ大家ひらく諾みて升を究竟の使直り然らばつとげと矢研の
河も宮門河をもち渡して不忍の池の畔に來ぬ程に夜の丑三不做起りぬ。酷く
走りしとるは寒夜の皆汗ぬる堪む喘を止めて這里那里不立休ひ又相譚
ふふ豪荊聲を悄しく今這小兵をりて城を抜まく欲するは助力をりて勝を取
かろり只詭の計ふあてるとる。其計策の箇様々と詞急迫しく叫れ示せば有
種自餘の僧俗も少く者歎さるる甲小僧くひ小僧く。大家其意をぬりし
有種豪荊のささるる躬方の僧俗二百五六十名搭駝來りて建裏をみる各解
披笠武器を身を固め大刀を跨器械を携て齊一脚を乱り走りて忍岡の
正門不造りて城門を敲る聲震立てやをて城内の人々誰うわ。今日の闘戦利

あつて行徳并に國府臺まで總領まふ御方の主率幾千名軟陳没去
たる升中御曹司朝良の幸ふ一方を殺終まて目今當城不渡らせり。迎
奉らむやと繰返すのあてり。この時這忍岡の城兵們行徳に寄隊の士卒
幾名歎方僅あふ脱れ來て寄隊敗軍の爲体朝良の辛くと近習の士不資ら
れて西國河原の方ふ落させ多御往方を知むとの城兵是ふ驚謀に頭人根角谷
中二告知せ在頭當場阿太郎赤耳九二郎小頭兎栗專作等も集合し商量する小
谷中二のふ。里見の犬士を勝み來て當城不逆寄其人多ね這城ふん防戦を幾
まの柱に所詮敵の旗の見えぬ間宅眷を穂北の別荘へ落し遣りて後力と進退
せんとの猛可ふ城内多婦幼ふ老兵を隸るとして情地不後門あり中遣りける事慌
ふ折るふ。今又定正の嫡子朝良の敗績をて行徳より脱と來ぬるとはく者誰り
驚きん慌て城門を開むとせ。這隊の小頭人兎栗專作吐嗟とをり推禁らるる

兵每非如御曹司の渡らせりふとも。野下王の夜ふ甚麻をやり。いまだ虚実を質さる。大
 門を閉く。先神曹司と二の近習。谷まらせ。後ふを御伴當と饒へ。角門
 よりさく。下知。子心。卒先郎君。入ら。角門。衝入。者。別人
 る。落船。餘。七。有。種。誼。夾。院。の。住。持。法。印。豪。刑。及。其。徒。弟。兩。個。の。勇。僧。突。面
 坊。豪。師。椀。坊。豪。著。を。喚。做。武。勇。劍。法。覺。有。四。人。齊。腰。力。を。抜。く。も。見。其
 守。門。の。雜。兵。四。五。人。所。介。之。返。せ。り。專。作。が。片。腕。托。地。と。釘。け。り。苦。と。叫。び。も。果。む。
 醫。居。小。撞。と。平。張。け。り。是。小。を。駭。怕。る。衆。兵。敵。あり。敵。あり。と。喚。り。之。逃。る。透。る。走。走。走。
 所。介。又。所。散。を。其。間。外。面。る。僧。俗。三。百。五。十。名。用。門。より。綱。入。る。豫。て。准。備。小。集。來。る。
 中。黒。の。旗。豊。島。の。旗。を。九。尺。柄。の。鎗。火。結。附。く。突。と。推。建。聲。高。や。り。小。里。見。の。防。禦。使
 犬。川。犬。田。が。先。鋒。の。頭。人。落。船。有。種。あり。在。り。新。附。の。修。驗。者。誼。夾。院。豪。刑。あり。在。り。
 と。名。告。被。け。相。喚。り。之。の。城。門。投。て。攻。入。る。程。小。根。角。谷。中。二。赤。耳。九。郎。當。場。阿。太。郎。老。兵

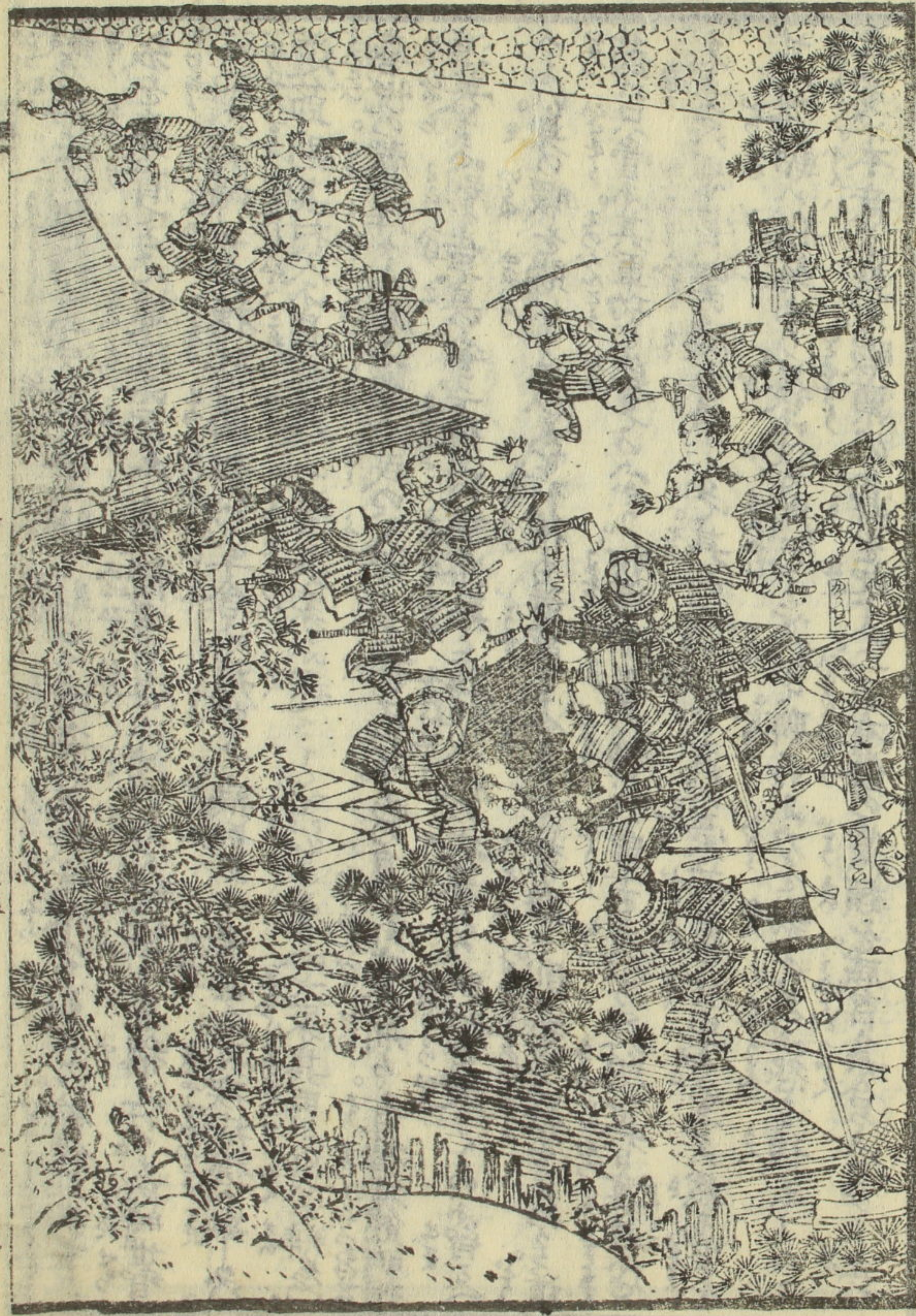
頭人既み皆鬼胎を抱きて宅眷を落せ。折る。小果。一。敵。の。逆。奇。を。犬。川。犬。田。落。船。を。ど。
 威。城。内。の。攻。入。り。け。り。名。告。諸。聲。せ。り。い。の。驚。れ。も。多。く。怖。ま。を。柱。一。柱。の。防。ぎ。は。三。板。の
 响。子。小。群。島。の。激。と。立。像。後。門。より。辟。を。突。て。逃。出。れ。城。兵。約。莫。二。千。有。餘。雲。霧。不。雲。の
 推。並。て。ら。續。け。て。逃。去。り。け。り。然。れ。落。船。有。種。の。思。ふ。小。舟。を。城。兵。の。腕。く。て。骨。を。打。を
 も。り。今。立。地。小。怨。を。復。し。と。會。替。昔。の。恥。を。雪。め。り。豪。刑。と。俱。小。躬。方。の。僧。俗。を。劣。ふ。之。
 擊。捕。り。所。の。敵。兵。を。突。檢。さ。る。小。當。城。の。小。頭。人。穴。栗。專。作。を。首。切。て。刀。瘡。見。死。人。七。十。名。これ。わ。り。の。こ。
 這。餘。の。皆。悉。落。亡。一。時。小。城。を。獲。り。け。り。升。中。に。穴。栗。專。作。の。深。瘡。を。れ。ど。小。頭。人。死。を。ど。
 他。の。根。角。谷。中。二。箕。田。取。蘭。三。等。と。同。惡。め。民。を。虐。げ。て。非。義。を。恣。に。名。を。行。賊。を。た。か。
 儘。駭。し。く。結。互。せ。り。且。城。内。を。展。檢。さ。る。小。婦。幼。も。遺。る。者。多。く。米。粟。尤。多。く。わ。り。航。へ。四
 門。を。守。り。せ。り。却。牢。會。り。世。智。介。并。小。梨。八。夫。婦。及。穗。北。の。隣。村。多。く。莊。客。と。其。妻。子。弟。妹。
 罪。多。く。緝。捕。れ。り。者。三。十。名。を。扶。出。さ。る。他。等。久。く。禁。獄。せ。れ。り。且。呵。責。の。言。も。堪。え。り

けは皆半死半生ありと幸ふ命恙なけし有種豪勲り慰め準備の茶と
 與へるど多皆困室臥あて火をとり那身を温めり六世智介梨八夫婦はさる其
 毎推急く墮獄の餓鬼が佛菩薩の救ひをいひ地へ皆感涙を落さす心飲
 みるるうけり井か中み世智介の裏小小才と共侶の密使ふ立時梨許立寄す
 とも酒乱ふ己を忘れて那禍鬼を惹出さしあり落船一家隣村の莊客も其餘歟小
 遇せざる罪輕なふあねども只是一時の口過ふ素より悪意ある者多し有種今々
 深くも憎まざり其以後を警懲して療養餘の人小異るるが世智介は且怖ま直感版
 志の聲を吞み泣けり介程は根角谷中二赤耳九二郎當場阿太郎等へ一千の城兵あり
 る防戦ふ心も慌て城を逃去るめり又思ひ後難の怕れあり徑小五十子の
 城小参りて箕田馭蘭二等小力を勦て那里小敵を待たし其方を投て行程小又那
 箕田馭蘭二と大坂毛野胤智小鈍くも城を攻落されり貫利金太布留川浅南等と

俱小城兵多く従へり這方を投て来ぬ小逢ひけり又只是のふあ大塚の城の頭人
 反橋雜記丁田畔四郎等が主の宅眷小相俱して城を落て来けり六谷中六款び今這
 二隊の幫助を借りていふ又忍岡の城を合復さんとて馭蘭二雜記等小商量す小雜記も
 亦たの謀を好きん然ハ俱して女性達を五十月の城へ遣て後安く做さん之主の憲
 重憲儀の妻子と己等が宅眷の老兵八九名を從せて那里へと落し遣程小但見ふ
 西北のより一隊の敵兵あり其頭人正小是犬山道節忠與多を合取馭蘭二
 雜記等の夢も知む只是鳥合の野武士等が却方の敗軍を破知りて或は落人を刺
 畧べく或は城を攻破りて不義の利を欲するらん先那奴們を撃捕りて其威勢小
 乘して忍岡の城を合復さんとて三隊を分ちて四所小埋伏を志して六多道節
 明相清英等小較破りて刺馭蘭二谷中二生拘られり這里小牽多利金太淺
 市雜記畔四郎等其隊の每共侶小較りて逃去りて存亡知む做りて然る

今落點有種が大山道節小解知せぬ。那身の来方豪前が義侠及當城を攻落し
 ぬるの顛末又生口の敵兵の招了ぬ知られ方。根角谷中二箕田馭蘭二及橋雜記を
 落合しゆまも都て上の如く小わぬれが道節ハ安ら毎小感歎の聲を込断て為小貌を
 改めて有種小向ひくの事。思ふ小優方。和殿の武畧豪前法印の義侠胆勇多く
 治が美談なる哉就て這生口馭蘭二谷中二專作等ハ至来其君を惑へ栄利を
 欲り。那民を虐けく。罪を害するの甚くむと安え。然ハ今番定正小説薦
 め。多名の軍を起させ人をも身をも喪ふ。皆是這奴們群小の致す所と我々異昔
 安房牽もて参らハ亦是館義成の御仁心ぬ。肯免わんも知る。今速小誅せ
 去。何をのよ。勸懲を正せん。權且牢獄小係置。明日八劍小行ふ。と敦圀
 猛く罵示せ。隊の兵毎阿と応。谷中二馭蘭二專作等を俱小牽立。退しけり。
 倭而大山道節ハ這地のみの趣と落點有種のひまも。洲崎の御陣へ注進ま。く。

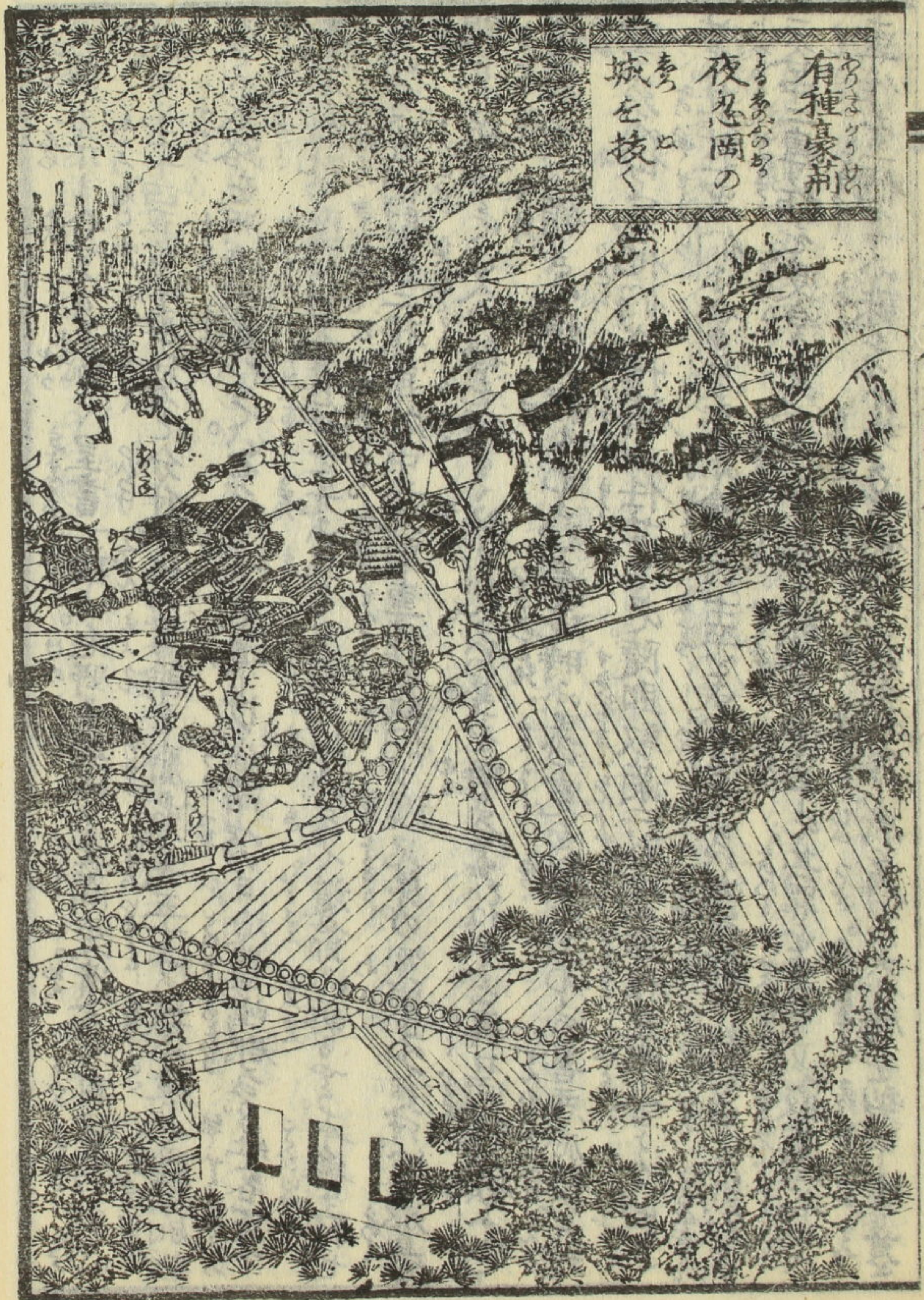
大段も示し合せて。馳々呈書一通と毛野小與。る。簡さ遺る。自書寫。め。心
 利。士卒四五名。小事。恁。と分付。て。件の書翰を齎。る。先。五十子の城。小造。り。大段。小別。談
 る。ハ水路を洲崎へ参れ。と。と。立。て。遣。し。け。倭。而。次。の。日。這。豊。嶋。郡。の。莊。客。百。十
 數名。穂。北。の。隣。村。の。者。母。を。先。小。さ。忍。阿。の。城。小。本。道。節。小。訴。す。や。今。番。生。拘。せ
 る。其。田。馭。蘭。二。根。角。谷。中。二。專。作。等。我。們。の。親。兄。弟。の。冤。家。小。い。ハ。ハ。ハ。那。身。を
 賜。り。切。て。亡。人。の。怨。を。復。す。欲。し。ハ。其。美。を。許。さ。る。ハ。ハ。と。異。口。同。様。小。願。ふ。小。を
 道。節。听。り。領。き。現。小。然。も。む。今。這。時。小。民。の。冤。を。解。せ。も。わ。ハ。善。惡。應。報。の。天。理
 空。小。似。方。他。們。の。情。願。小。任。せ。ま。し。隨。即。馭。蘭。二。谷。中。二。專。作。を。牽。合。り。出。さ
 せ。其。莊。客。們。小。合。り。ま。る。小。檢。便。の。主。卒。を。遣。さ。る。ハ。大。家。都。歡。び。勇。之。則。馭。蘭
 二。谷。中。二。專。作。を。受。合。り。の。牽。立。馳。々。城。外。小。牽。立。て。其。罪。を。責。罰。り。馭。蘭。二。谷。中。二
 專。作。を。一。個。々。小。誅。す。小。先。を。斫。落。し。足。を。斫。落。し。胸。を。劈。れ。大。小。腸。を。裂。せ。竟。其。首



八代将軍徳川吉宗

十五

大坂の陣



有種豪將
夜忍岡の
城を抜く

八代将軍徳川吉宗

大坂の陣

敵落す猶怨盡すは壯客の悍く壯る者毎其突を咬ふもむけり。檢使則其首三級を梟首して速近示え。觀者毎小堵の如く愉快を稱え。時世智介梨夫婦并小穂北の隣村人の牢舎小疲労。病臥者毎其疾病瘥り果て道節則其村人小是を渡して皆其家小還ることを喜ぶ。大家其再生の因を拜喜。喜悦の聲洋々と耳小盈く。民の父母とを稱えける。その日法印豪荊有種道節相清英小別を告。身小下總小猶落船と穂北人們の安春む。野納も久くあ小留る。身小暇を賜べといひも有種道節も今さら小禁難く則其意小任する。道節ハ口管小其軍功を譽る。和僧今番の挿は勇士も及びた所之異且寡君小元上る。恩賞望の隨る。其あるをこれ豪荊是を安むといひも然る望をせん。落船小俗縁む。義小仗る所己とせむ。聊小力を勸て為小怨を復去。其美の本意小暇票小身を起して二百有餘の黨類を咸召集合へて。

俱と誼夾院村へ還り。以譽者受る。是より後近郡邊郷る郷士豪民の善小與して里見の徳を慕ふ。故道節が隊小附く欲して當城小味なる者。且母を多かりけり。道節が軍威小壯く。一萬餘騎を做りふけ。當下有種ハ道節小談む。當城ハ大人既小將とて。印東荒川の勇士あり。且軍兵小置か。居とも要る。我穂北の壯。根角谷中二が是を別壯小。家作許めく。建連。今這時小令復さむ。孰の日を俟へ。明日故郷人小。うち入りむ。敵尙殘居る者あり。獵場の獸小似す。一個漏さず。撃捕。と喘を道節勇と譽て。其談寔め。遮莫敵を侮ら。行む。我五百個の雄兵を。和殿を。送ら。戰飯軍用の錢財ハ當城内小多。和殿の隨意。とい。有種怡悦小堪。遠く退。穂北人皆小那美を告。準備風。次。の。早。天。落。船。餘。七。有。種。小。二。世。智。介。梨。八。及。穂。北。百。四。十。五。名。天。山。加。勢。の。軍。兵。

五百名を前後不立し、騎馬計り、甲冑甚細、小名状さぐ、既ふて有種、徳北の莊、近
 づく程、這里、根角谷中、定業、專作等の、寄眷の敵を避て在るも、多かり、或又、那奸黨、小諛
 媚、利を欲する、壯客、賢聖の家を作て居るも、勘ろ、さう、小忍岡の城、有種、攻落され、
 谷中、專作、道節、隊、小生、捕られ、竟、小誅、戮せられ、支知り、駭、怖、れ、情、惑、ひ、逃、去、る、
 欲、志、を、徳北の隣村人等、追、蒐、く、鋤、秋、釜、を、り、と、殺、せ、教、志、も、多、かり、と、其、事、後、小、説、え、る、
 然、有種、は、於是、重、ね、も、濡、ま、故、の、莊園、を、令、復、し、け、る、と、る、ま、谷中、に、建、て、備、新、し、た
 廬、舎、多、く、わ、れ、其、身、は、は、ち、ち、郷、人、們、の、も、ち、合、合、せ、り、膝、を、容、る、小、便、り、の、け、し、四、直、を、歴、て、
 郷人、を、幾、名、欲、下、總、獲、嶋、の、誼、次、院、遣、志、直、家、井、小、子、院、多、勇、僧、們、の、多、く、東、西、を、贈
 する、と、も、て、自、他、の、宅、眷、を、召、返、せ、く、有、種、の、妻、重、石、を、首、小、郷、人、の、母、女、房、老、る、杖、の、
 携、で、壯、る、ハ、被、裏、著、等、老、と、と、搭、駝、ひ、り、穉、子、の、も、と、掖、ひ、皆、然、だ、り、あ、ひ、り、然、け、れ、
 とも、徳北、の、猶、敵、地、な、れ、大、山、が、加、勢、の、五、百、名、八、升、が、儘、這、頭、の、在、陣、と、く、く、る、ま、と、成、り、

然、ハ、這、時、下、總、葛、飾、る、國、府、裏、美、城、の、里、見、安、房、太、郎、義、通、朝、臣、の、從、軍、の、執、事、東、
 六、郎、辰、相、杉、倉、武、者、助、直、元、田、稅、力、助、逸、友、繼、橋、綿、四、郎、喬、梁、真、間、井、權、二、郎、秋、李、津、鷲
 手、古、内、美、容、振、照、俱、教、二、弘、經、わ、り、就、中、這、隊、の、防、禦、使、大、塚、信、乃、成、孝、と、大、飼、現、八、信
 道、是、又、行、徳、口、の、今、井、の、柵、の、兩、防、禦、使、大、川、莊、義、任、大、甲、小、文、吾、悌、順、の、其、隊、
 の、頭、人、滿、呂、須、五、郎、重、時、肩、持、兼、杖、朝、經、大、樟、村、主、俊、故、滿、呂、再、次、郎、信、重、は、吉、就、景、重、
 あり、武、藏、石、濱、の、城、の、登、桐、山、八、郎、良、子、わ、り、同、國、五、子、の、城、の、軍、師、大、阪、野、野、智、の、其
 隊、の、頭、人、浦、安、半、助、友、勝、十、代、丸、圖、書、助、豊、俊、小、湊、又、小、水、門、目、堅、宗、等、是、の、從、小、勇、婦、音、音、及、
 妙、真、曳、子、單、修、郎、範、内、葉、四、郎、援、高、俵、八、亦、道、隊、の、在、り、又、大、塚、の、城、の、小、森、但、郎、高
 宗、木、曾、三、助、李、元、わ、り、又、忍、岡、の、城、の、防、禦、使、大、山、道、節、忠、與、わ、り、其、隊、の、頭、人、東、小、六
 明、相、荒、川、太、郎、一、郎、清、英、等、是、の、從、小、按、志、小、武、藏、小、忍、岡、と、唱、る、地、方、二、所、わ、り、古、歌、の、詠、る
 忍、岡、の、即、多、麻、郡、の、小、遠、川、又、玉、川、小、遠、が、志、又、不、忍、の、池、の、前、面、湯、島、の、稍、盡、意、の、出、寄、

八代傳九輯卷四十七

文藝堂藏

をも不忍の名小對令。あを俗小忍岡とよ一名向岡是。あを俗稱多を知人。同話
 休題又穂北の壯小落船餘之七有種大山。加勢五百名を領てあ不在。又相摸る。新
 井の城。防禦使犬村太用礼儀あり。臨時追加の頭人田税。賀九郎逸時。古屋八郎景
 能是。小従云。又鎌倉。堀内雜魚太郎貞住あり。安房の洲崎の本陣。防禦使大紅親兵衛
 仁あり。政本。大全孝嗣。姥雲代四郎與保。東峰。萌三春高。鱗船員六郎繁。足須。利。檀五郎
 有數。二四的。寄。金五郎團平。天津九三四郎員明。磯崎。増松。有親。真塚。紀三。漕地。喜。助。太
 号。是。小従。云。石。龜。次。團。太。越。躰。三。萱。野。の。阿。弥。七。椿。村。の。墜。合。亦。這。隊。小。在。り。益。主。將。義。成
 朝臣。大敵。敗績。の後。大江。親。兵衛。が。姥。雲。代。四。郎。等。と。俱。小。京。師。より。り。來。る。葛。西。の
 關。戰。小。軍。功。あり。政。本。孝。嗣。們。の。勇。士。伴。當。十。數。名。を。將。へ。昨。日。洲。崎。の。陣。營。小。參。り。六
 義。成。主。へ。仁。が。京。師。小。在。り。日。の。奇。談。及。葛。西。行。德。口。の。關。戰。の。顛。末。を。詳。小。説。知
 了。と。或。の。驚。駭。或。は。ち。笑。れ。賞。感。持。小。浅。く。政。本。孝。嗣。以。下。姥。雲。代。四。郎。及。新

參。ゆ。戰。功。あり。者。皆。見。參。を。饒。さ。ま。て。其。忠。其。義。を。譽。え。存。る。就。中。孝。嗣。次。團。太。等。裏。小
 素。藤。對。治。の。目。戰。功。あり。且。孝。嗣。が。忠。孝。る。豫。聞。召。所。と。今。より。七。大。將。と。俱。小。當。家。の
 股。肱。と。一。と。名。刀。口。を。賜。り。け。堀。内。貞。行。執。達。る。且。貞。行。の。親。兵。衛。代。四。郎。小。妙。真。音。首。也
 手。單。節。が。五。十。子。の。城。を。奇。功。あり。多。毛。野。が。注。進。の。趣。を。告。知。せ。る。と。甲。乙。の。會。話。を。具。小
 せん。獨。々。ま。る。と。細。々。小。過。ま。言。首。で。漏。多。看。官。是。を。查。せ。下。是。より。先。小。東。峰。春。高
 鱗。船。船。長。足。が。軍。師。大。阪。の。密。策。小。より。之。情。地。小。捕。ま。せ。る。行。德。口。守。隊。の。敵。將。羽。谷。朝
 良。と。藤。本。乃。自。の。代。軍。稻。戶。津。衛。田。亮。あり。又。犬。村。太。用。が。虜。ふ。と。ま。あ。せ。る。敵。將。三。浦。義
 同。義。武。の。義。成。是。を。陣。中。小。留。め。馳。稻。村。の。城。遣。之。次。磨。小。頼。け。り。表。れ。も。因。徒。を。之
 見。る。と。賓。客。の。礼。厚。と。目。毎。の。款。待。浅。く。は。親。兵。衛。が。似。り。來。ぬ。上。に。之。他。を。洲。崎。の。守。將。小
 志。義。成。の。貞。行。を。將。へ。稻。村。へ。還。り。ゆ。ひ。け。孝。嗣。與。保。以。下。の。輩。ハ。皆。親。兵。衛。小。従。云。八。開。が
 儘。洲。崎。小。在。陣。之。仁。が。一。橋。小。國。府。臺。より。使。价。を。ま。る。と。時。風。瀧。田。の。城。へ。受。え。て

義実老候歎天なるを疾見まわく思ひぬ。猶陣中在るを時々食餌服を賜ふ。其徒然を訪せむひけり。左右を程今故も將小暮んとし、曩小本陸三所の大敵を同日小成敗北の後山内頭定小野る沼田の城小在り。長尾景春小白井の城小在り。扇谷定正武藏國入間郡河鯉の城小在り。俱小再戰の勢も多。諸侯離叛是是者。志と望えし。義成主則下知と今封内小在陣に要る。國府臺及行徳口。諸將を皆召返さざる。然義通君小大塚信方小大飼現小東六郎小杉倉武者助。田稅力助等と俱小生拘の敵將成氏憲房朝寧為景并小齋藤盛実等を領。稻村小凱陣。國府臺の城小真間井樵二郎小繼橋綿四郎小潤就鳥手古内振照俱教。等あり。故の如くを成さ。又今井の柵小大川莊介小大甲文吾是を破却。満呂須五郎小安西就小大樟村主肩持儀杖等と俱小生口自亂憲重胤久を領。亦是稻村小凱陣。總兵一萬五千名騎馬武者歩兵列を正。甲冑華麗小齊々。と云ふ者なり。

夫れども生拘の人々皆是宛家。貴介公子二城の主將之囚徒をり。と云ふ。狂言小數間の房屋を造。其第一の房小成氏第二憲房第三朝寧第四。自亂第五。為景の房小又憲重胤久盛実。各其主憲房朝寧。自亂為景。同居小甘。屏居の徒然を耐る。と云ふ。又義同と義武。天井を隔。別室置。唯朝良と由充。客房小在。死放免の如。勢待由亦重。この時大江親兵衛。們小成洲崎の召返。と那里の遠見の士卒。二百名を置。義通以下防禦使。諸頭人凱陣の次の目小皆召集。見義成則正廳。對面あり。兩茶片茶の礼を行。この軍功を賞せら。荒川清澄堀内貞行も。這席小與。當義成主の家。一老臣。五木士。を身邊近。召を各。思ふ。這回生口の人々。皆貴人。城主我馬と慢侮せん。昔源平の闘戰。平三位重衡生拘。鎌倉小囚置。時頼朝對面。と其不幸を慰。回の美。其後宗盛。虜小。録倉小呈送。され。時頼朝是對面。

せむ。他ハ則大臣の既ハ解官の罪人ハ是時ハ當テ頼朝の冠位昇進を認めず抑平家の
 源氏の為ハ是累世の冤家ナリ。上二人^{後白河}の奉為ハ是驕僭の乱賊ニ今他を以テ例
 とまぐく。我今主客の美ふより對面まを名。甘るべし。各意見受ま欲いふ。と
 と同じく大家阿とをり。亟み答るる。姑且て大塚信乃ハ辰相清澄貞行等ハ會
 釋と。主小向とを答る。諸老の御美を答む。と答ま。鳥濟が。最憚り。と
 愚意を。稟上君今那敵將達ハ御對面の一條ハ美ハ寛仁太度ハ博愛極と。以
 へ。あつれども。和を講む。と。他々ハ對面ハ他ハ恥ま。人を受ま。心
 を。及人を受ま。專の宜ハあ。と。親兵衛ハ議を好。現ハ成孝ハ
 意見も。愚意も。相同。那人々御仁ハ感服の後。御對面ハ。義成ハ
 貞行辰相清澄及莊介現ハ小文吾も。大家是ハ從。答。義成ハ
 ろ。今成孝ハ意見ハ依衆議。任地。推且對面の美。止。朝多の起。三ハ

響。饒何。心を用ひ。我。容を受ま。誠心を。就中。和。由充
 其。賢良。且人を知。あ。わ。莊介。小文吾。受。舊。因。あ。故
 他。虜。ま。を。服。大。目。外。孫。多。朝。良。成。の。生。拘。ハ。他。忠。美。の。為。死
 ず。と。を。を。胤。智。豫。計。る。所。あ。を。春。高。敏。足。て。他。を。俱。不
 捕。寄。我。因。て。莊。介。小。文。吾。を。朝。良。由。充。の。為。小。東。道。と。ま。の。意。を。も。宜。く。傳。ふ。下。這。餘
 の。何。々。と。言。遣。も。仰。ま。れ。ハ。大。家。俱。不。言。兼。と。先。這。廳。ハ。果。多。任。而。又。義。成。美
 大。川。莊。介。大。田。小。文。吾。と。滿。呂。復。五。郎。再。太。郎。安。西。就。介。磯。崎。增。松。等。を。召。さ。せ。復
 五。郎。願。ひ。の。ま。み。滿。呂。再。太。郎。を。以。て。養。嗣。と。ま。又。安。西。就。介。磯。崎。增。松。ハ。備。總
 角。ふ。と。這。回。の。軍。功。諸。勇。士。と。拮。抗。を。其。亡。親。の。靈。の。致。を。所。致。宜。小。奇。と。と
 の。下。あ。を。以。て。當。家。譜。第。の。家。臣。と。ハ。少。く。小。增。松。ハ。乳。名。の。い。ま。と。実。名。を。た。小
 わ。ま。他。ハ。阿。弥。七。と。い。は。実。父。也。又。南。弥。六。と。い。は。義。父。也。二人。ハ。篤。実。人。ハ。義。烈。這。親

小之個子わ。あをのえ名けし有親とま我のあろをひよか。と最懇切御され。復五郎親子就介等が勢ひはつと増松は是等の恩言ふ感涙漫の暗之俱ひ言義と
 稟しけり。其後又義成主大江親兵衛大川莊介と満呂復五郎石龜次團太越卿三西的
 音舎五郎須々利團五郎等と召せし。又大川莊介大甲小文吾と盾持兼枝大樟村王天
 津九三郎等を召聚し。且宣ふ。汝達の戦功に既ふ感思食各秩禄異日定め
 らるべし。就て大義を述べられども。満呂復五郎は行徳の造りて。權且那地を治む。石龜次
 團太越卿三をのり。次役とせ。又西的音舎五郎須々利團五郎八國府臺の城の小頭人とせ。
 其徒六十餘人と俱ふ。喬梁秋李の隊。小就て宜く那地を成るべし。又盾持兼枝大樟村王
 身の暇を賜りて。大刀各一口。時服一襲を被けて。其地の吏を做され。且其郷黨千百十
 數名の都て三稔の調貢を免除せらる。又天津九三郎ゆも。身の暇を賜りて。恩賜の大
 時服の右の同。其主上井理墨之助ゆも。由を盡すべし。と仰り。その他阿弥七墜八

をも召させ。這兩人。望野椿村の邑長を做され。且諸役免除せらる。是も又身の暇を
 賜りけり。猶も外の功あり者。市川の依助西國河原の。向本幸三太枝獨鉆索平吉只の
 参らむ。他等も異召せ。恩賞あり。先大既の制度を盡せらる。是より先
 大村太用大坂毛野大山道節落鮎餘之七等。勝軍の趣。各既。其注進のよ。よ
 ふも具み知られ。を又り。つとむ。然るに仁君謙遜の心。似ける。聞戦全勝の勢。ふ
 乗せ。人の地を畧し。人の城を奪ふ。あはね。他が棄て。主る。城を守り。せん。とせ。あ
 今茲も。日數僅あり。わ有。程。大川莊介。大甲。文吾。稍。津衛由充。を可。望。訪
 慰め。義成の仁。慈。心。操。を。信。知。せ。は。この。を。と。且。裏。深。川。の。聞。戦。公。小。文。吾。が。心。わ。り。て
 赴。この。邊。より。満。呂。復。五。郎。が。既。小。逼。り。て。免。る。も。わ。る。ま。り。一。軍。師。大。阪。が。逆。り。情。地。の
 善。策。を。り。東。峰。崩。三。鱗。船。目。六。大。江。屋。依。介。等。小。課。船。の。迎。せ。を。當。目。を。小。文。吾
 莊。介。も。復。五。郎。も。知。む。と。敵。の。援。兵。多。う。この。思。ひ。を。云。と。解。も。示。其。由。充。も。朝。良。の。亦

今なき大川大田の報恩徳義毛野の智計を感嘆する。心程恥しく思ふ。又自由充朝
 良のころは憲房朝盛成氏自胤以下の敗將憲重胤久盛實等も皆くは鏡勇萬夫を
 物とせざりし。義同も義武も里見君臣の款待厚く仁なく且れは誠意感服と
 先非を悔ざる者も多し。為小貌を更めて俱に歸降の心あり。定正賢者を冒嫉しと
 名の軍を起せしを恨しとと思ひけり。然而新の年立りて文明士卒の成りたる者
 賤たも某の礼某の式を壽祝の事敏く送ふ父加と益を薦むる者。光陰の過る意を
 日影遅々々早晩も暖く野邊の柴鶴鶴軒端より來鳴り梅の盛も梢過りて左右を程
 二月の初日有日五十子の城あり。大坂毛野の使の雜兵西三名快船ありち乘りて洲崎來
 着し稻村の城に詰りて毛野が意見一通を呈し則義成則在城の五太士大坂大田を召
 聚し其書を親兵衛に讀せしめし。毛野の意見は道く臣胤智既く八百人の計畧を
 し。水舟數千の敵船を燒盡し亦義兄弟等陸軍數萬の敵兵を斫りては房總

三州を泰山の安の置り。是豈我仁君の神本意あるや。実己とてはるの時今仲
 春ゆり。且時正小向とを時兵晝夜等分の美めて佛説のあつて七日を彼岸に彼岸
 西方浄土に此岸に則波渡りて中流は是煩惱之是をり念佛者流去の日小予其福を
 修する時ハ則死人成佛の便りとを伏請。大師父課と自他戰没數萬の士卒の為
 水陸の施餓饑を修行せしめ且年来の軍役の疲勞を他方の窮民馬兒們に米錢
 多く取せし。仁政正小死を起し且枯骨も及ぶの多し。武藏相摸新井五十子大塚
 忍岡這諸城の軍用の為敵の積貯へる米錢も是併民の膏腴を絞りとる
 者也宜し。是をり彼施行小充。一時失ふは臣胤智悲泣哀悼の至堪は誠惶
 誠惶死罪死罪謹言とを書さる。義成是をもちて汝もよの哉をいふ思ふと回れ
 五太士阿とをかり頭を低る。開か申小信乃先父合まらざるも其美ハ臣等も豫て
 心づいてい。うち譚ひの。那珍容の款待ぬ。暇をいそぐは。三票上よりたとい

莊介小文吾現八親兵衛も共侶の毛野が意見の始り思ひ量りし所へいふ師父を召寄
 り仰合させ多か。と異同様の請ひし義成然と黙頭て開き我風意も相同し
 大の去歳の十月那奇風の功成り後毛野が使と共侶の洲崎へ交り来る多か并に儘延
 命寺へ退りてせも未だ單方丈の屏居て口を讀經の聲を絶む人ぬ逢せどやえり
 遞莫是等の好事を告るべ欲く参るべ。我今書を遣て召寄て這意を沁見え
 然れど使者を走らせく大を召せぬひり。焦而次の日大法師の僕をのこ従へし稍
 村の城のあまよけの義成則五大士を召合せし件の一多及ぬを大を果て裏に
 かり。那四の劇策の巨僧始り好とせせ云々と論ど推辭と毛野太用が口車載せぬ
 るは罪惡を醸させり。ある今罪障懺悔の爲ふて眞福を修せぬ公弟之盾を
 賣るふ似たり人を殺せを不仁と知らぬ始り殺せぬ好事をせぬふなる。然れど
 今に至りては經典供養の力に借らば何をもと無數の普量の冤鬼を濟度做を提や

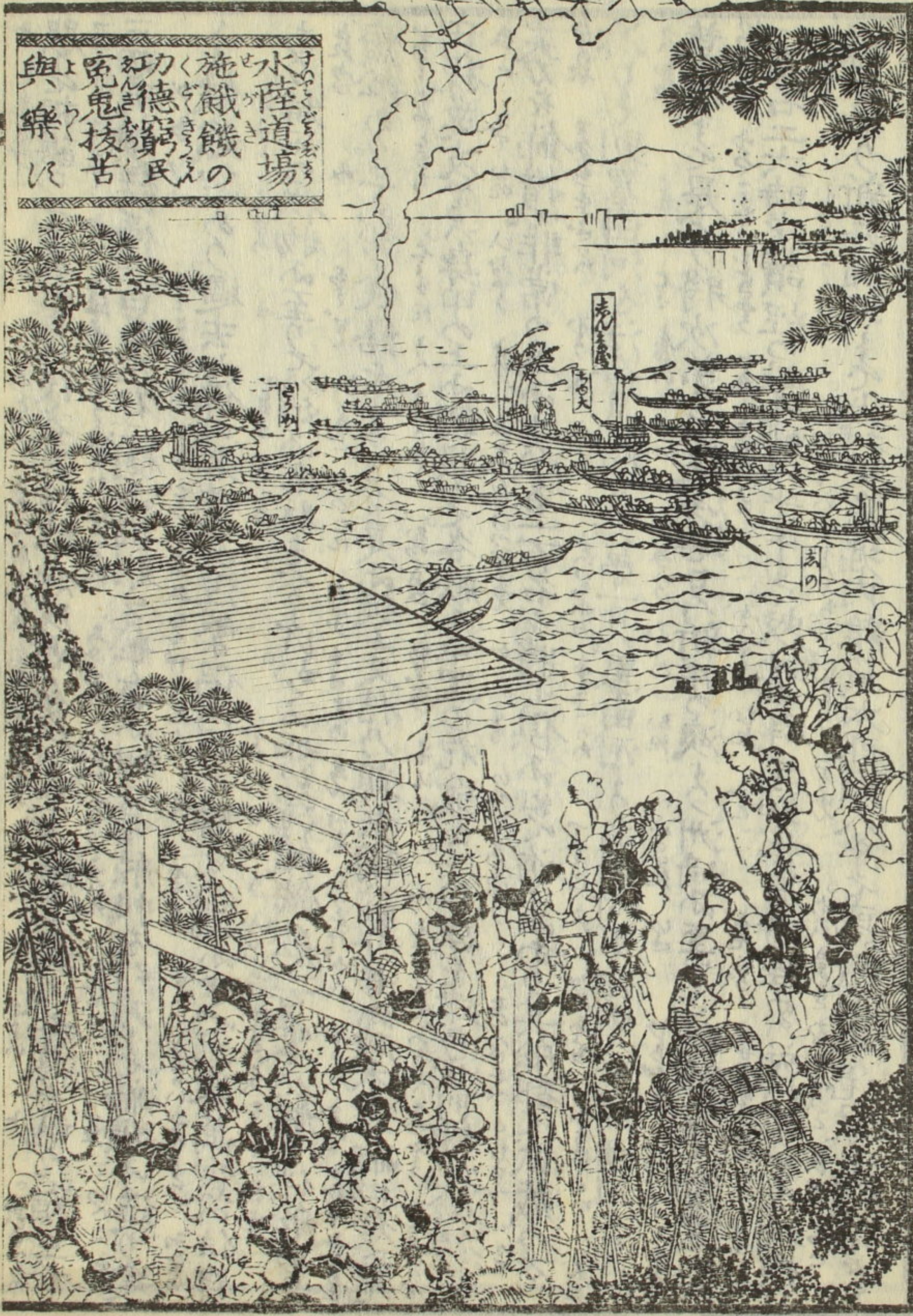
此況窮民馬兒の米銭施行の經を讀死を吊ふ猶勝まり速に御沙汰わりの
 ありふとを各々の當下信乃がの師父今番施餓餓の導師お作り伏姫の
 御紀る那水明の數珠をそ必用ひのべけれ其記數の八箇の玉を我感得るなり
 今に至りて返まつては兄弟等全聚て當家仕なる上ハ必本返すは東西を
 受けとつ親兵衛莊介小文吾現も共侶の數珠の役行者の伏姫お授けし
 靈宝物おのま。然らば今番の大好事の二百八具足其這功德をのれ那冤鬼を鎮む
 足りぬべと議するを大の使のむ否を今番の和殿等の感の玉に借るふ及む最も
 不測の事と館の女召ねが。曩の巨僧谷山の奇風を發する瘡襲の玉囊の藏
 め懐の寺の還りて取出て見ける怪し件の玉の毛皮自然と裂破れ内ハ八箇の白玉
 あり。うち驚か合抗見るふ亦是其玉毎の自然と顯れ八箇の文字の奇なりふ
 づもわねば件の玉を用ひと合せし讀見るふ正に是阿耨多羅三藐三菩提讀

但三の字の玉の一箇を先多羅の下貌の上の措て是を三貌と讀之又菩提の上の措更之三菩提と讀べし。有信れば一字兩用は九言の八玉の足れりと云。按ずる瑯琊代醉篇の阿耨多羅三藐三菩提を成覚と注し。三藐三菩提を成覚と云。是則菩提正覚を成覚の見の義の正覚を菩提と云。又一説の阿耨多羅三藐三菩提は佛所證仁不同人至仁の時必是正覚を成て菩提に至らざる者なり。譬の王子の君仁を不仁の君義を不義なりとの如し。人の一身五臓の神君至仁の時必は脚の是を資する者敢不仁を成せざるも。是を阿耨多羅三藐三菩提といふ。是不由て之を觀て八犬士の感ぬる。那仁義八行の八玉の人間所要の至宝なり。死を吊以減を濟す佛會の相心くは。この故不易なる。這八の玉をの。今番の所用の做さるる。是亦亦役行者の善巧方便なる。欽佛法不可思議廣大無量奇々玄妙のひらき。と言詳不説示る。件の玉を識數不申たると。水晶の數珠を取て見せまると。されば義成主を首ゆく。信

乃親兵衛莊介小文吾現も共侶の其事を听其奇の感とて耳を傾け目を注と稱賛聲を齊くを开が中不信乃がの奇。師父阿耨多羅の注釋の寔は是精妙ゆ。雅俗の惑ひを醒まふ足れり。昔後醍醐天皇叡山小行幸の折津守國香の歌の契りむ。この山も見つ阿耨多羅三藐三菩提の縁を植けん。と云けるを太平記第二の巻載る。意ふ小國香の阿耨多羅三藐三菩提を成るの義を見つ。國香を今もせむ。せむ。師父の諺解を授せる。他其是を何と云ふ。との親兵衛莊介も寔は然る。と云ふ。義成の見の渡りぬ。數珠を受合りち。戴た。現小文吾と共侶の識數の玉を見て齊く。感歎も當義成主の。大向ひ。現小那薩襲の玉も。邪物のより。那音風を發まふ。至る。我を幫助。大敵を敷退ける。大功あり。其後。小玉と變とて。奇恃を示る。今番施餓餓の發願の佛意。稱祥。あわん。先このよりを老毎示と施行をいへ。仰不信乃。善八あり。然。而。辰相。清澄と。真。逸。友

孝嗣さうじゆは同席どうせき召喚めいげん令しやう事こと倭やまと々々傳つたへまたた大家たいか其その寄よふ驚驚おど嘆なげく施施せ行ぎやうの事事こと稱なづ譽かへを當當あた下した義ぎ成なり又また課かせらく軍軍ぐん師し胤いん智ちの意意い見けんふ由由よし今いま番ばん施せ行ぎやうの米米こめ錢せん皆みな敵てき城じやう小せう多たり當當あた下した義ぎ成なり又また課かせらく軍軍ぐん師し胤いん智ちの意意い見けんふ由由よし今いま番ばん施せ行ぎやうの米米こめ錢せん皆みな敵てき城じやう小せう多たり當當あた下した義ぎ成なり又また課かせらく軍軍ぐん師し胤いん智ちの意意い見けんふ由由よし今いま番ばん施せ行ぎやうの米米こめ錢せん皆みな敵てき城じやう小せう多たり當當あた下した義ぎ成なり又また課かせらく軍軍ぐん師し胤いん智ちの意意い見けんふ由由よし今いま番ばん施せ行ぎやうの米米こめ錢せん皆みな敵てき城じやう小せう多たり

いおちちの地地ち造ぞうりて重じゆう時じ秋しゆう李り管くわん指し揮きまし又また船せん施せ餓が餓がの頭頭かう人にん親しん兵べい衛ゑい信しん乃なり壯さう介けいたらん政政せい木ぼく大だい全ぜん杉しん倉そう武ぶ者しや助すけ田でん税ぜい力りき助すけを副副ふくとせ又また這た議ぎを風風かぜく毛毛もう野や太たい用よう道だう節せつ管くわん小せう池ちふなく安安あん房ぼう上じやう總そう下げ總そうる僧僧そう俗じやく小せう狗かう知ちを入入いれ大だいの箇箇か様やう々々と言言い訂てい寧ねい小せう課かれ大大だい家か公こうとく言い兼けんて大大だいの日日にちの衆衆しゆう談だん果くわめけり却くわく說せつ當たう日にちある隨隨じ小せう房ぼう總そうる諸諸しよ山さん諸しよ寺じの長長ちやう老らう道だう德とく施せ餓が餓がの法法ぽう會けいを帮帮ぼう助すけと各各かく徒た弟ていを徒徒た延えん命めい寺じ小せう來らい會けい又また各かく房ぼう總そうの三三さんる武武ぶ藏ざう相さう摸も多た老らう僧そう智ち識しきも皆皆みなの心心しんを修修しゆす俱俱く小せう感かん悦えつせる各かく安あん房ぼう小せう推すい渡たうり未未み法ぽう會けい小せう與いららく欲欲よく者しや百ひやくを計計けいす大大だい則すなは其その德とくを推推すいを試試し後ごを課課かる各各かく差さあり大大だいの時時じ信しん乃なり親しん兵べい衛ゑい壯さう介けい孝きやう嗣じ直ぢく元げん逸いつ友ゆう等とうと俱俱く小せう洲しゆう崎せきの浦浦うら小せう施せ餓が餓が船せん百ひやく十じゆ數すう艘ばうを相相さう浮うゆ件件けんの大大だい衆しゆうを分分ぶんち載載さい其その中ちゆう央やう多た巨きよ船せん少せう大だい法ぽう師し香かう染ぜんの法法ぽう衣い小せう烏う輪りん子しの袈袈け裟さ被ひく小小せう白はく毛もうの拂拂ひ子しを合合がれ打打た扮ぱん華か美みる小小せう眉めい秀しゆ鼻び卓たく面めん色しき威いわりて猛猛まうららど死死し達たつ磨まの後後ご身しん秋しゆうと思思しふ可可かの骨骨こつ相さう小せう衆しゆう僧そう都とて敬敬けい

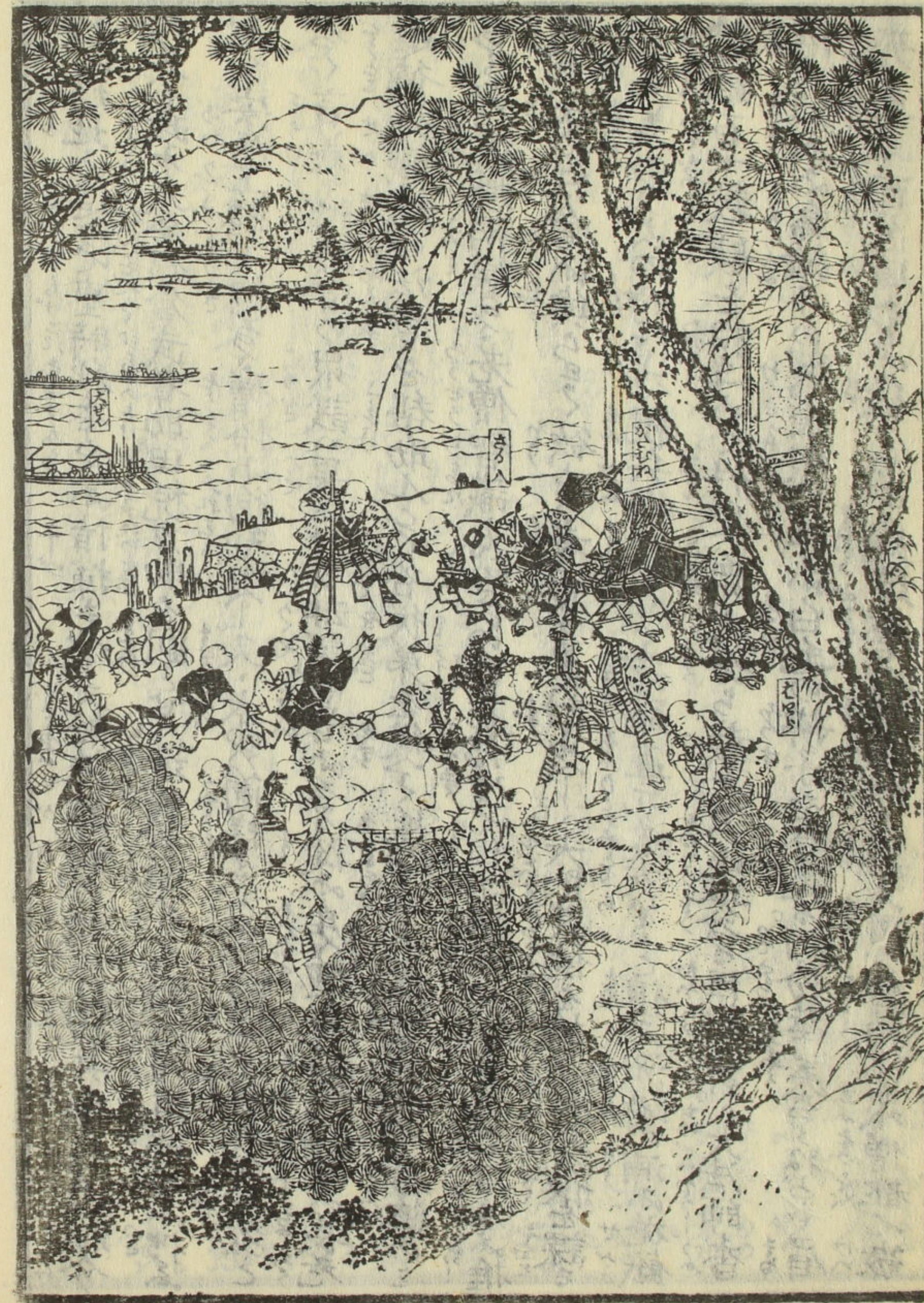


水陸道場
 施餓饑の
 功徳窮民
 寛鬼技苦
 與樂に

大傳九郎卷四十一

二十六

文政六年正月



大傳九郎卷四十一

文政六年正月

服と相譲の者者たるは後方への沙跡念成喝食行童手爐を執り如意を執りて相立首
三四名讀經の僧二百名左右二側小挑列舟船毎小幔幕舷帷を引渡して船頭小造り建
る餓饑架あり過去七佛の名號及涅槃偈四句の幡を八隅小建て三東萬靈の位牌
あり種々の供物小至りその細小名状もくはかしの如く施餓饑船二百零八艘又伴船あり
齋船あり三つの食膳を掌る者是小従又信乃親兵衛壯介并政木孝嗣倉庫元
田税逸友等八身甲の上小朝服して各船小中黒の花號ある白旗を建り位前錦炮鎗持肩
采方を飾措て非常の爲小士卒各二百名を將て俱小遊海上あり其船都て武藏の方へ
浜りて則墨田河を法會の始とす第一日墨田河より西國河へ第二日西國河より科
草澳まで是より將次第を追ふて七日の新井の澳より洲崎に至りて結願とを船毎小衆
二百名二六時中讀經の聲蟬々乎乎と蚊虻の群る如くその時陸地の施行のあり相摸の
鎌倉より新井浦河まで犬村大角堀内雜魚太郎頭人等と或は城下或は港口米錢許長く

積措て老兵士卒是小與る又假名川より高嶽まで大阪毛野浦安牛助十代九圖書助等
是を行小湊又小水門目鮫内葉四郎等小頭人等又大塚礪川の邊小森但一郎
木曾三介西國河原の鱗船員六東峰朗三小五三太妻吉吉を副とて又行徳より本所
深川の犬田小文吾頭人等満呂復五郎小頭人等石亀次團大越卿三等是小従ふ又國
府臺より葛西龜崎の犬飼現八頭人等真間井樞二郎繼橋四郎是小従ふ洞鷲鳥手
古内振照俱教小頭人等又墨田河の西河原石濱の城の下八登桐八郎頭人等老兵士
卒施行小與り従ふ者數りく又岡山の壘の頭人鳥山真人等も此の這り小與る身
也都這數箇所小積措れ米錢八猛可小山の必来一像く斜奴あり檢鈔あり施
行人別米一斗錢五音文と定めらる女子と小児の半分を取らるるといふ夫後の莊
客其地の村長等相従ふ者枚擧る小違あり小介程小介の年來軍役小疲れ果く
家を喪ひ子を售妻孥離散して餓渴不堪る他方の窮民乞見柵草見ハ老翁を

扶け棒を扱ひ或は赤子を駈敗裏を引提り陸續とて来ぬ者蠟見の甘た小聚ふ
 か像く其米錢の多ふ之施さる東西も亦過分胆を潰して感涙を流さるなり
 多と戦て拜むもわけて徳を仰だ恩を謝し其米錢を賜りて還りやわり来ぬなり被
 岸七日を涯りて施を更の敢泰らむ受者嗟来の怨を多く今戦世の暴虐
 中此這活阿弥陀も在せ欬とて喜悦の聲洋々と耳も響る目もろりけり既を結
 願の目も微りく大法師の施餓餓船を新井の澳に経續果て洲崎のうづ漕り
 来ぬ之隨従の二百余艘相距て遠く道師の船を圍繞しついで讀經の聲響く
 衆口の多かるも只舌より響く如く細大音聲口調錯雑其聲龍宮城まで暢ふて天
 衆も越ふ来向て這大法會を資する多々江河の鱗介波濤を崩れ苦提心を發
 らんべの七箇日雨あざむ六日の日侍不海暖く虚空も蕭然の風もけく潮水平坦ふくと
 眠鷗流まば幾群の知鳥俱も出小羽を斂め磯松も集る老鶴これ為小求漁らま下

其の相村の城内より里見義通御曹司舎弟の君次磨股子と共侶洲崎の浦に
 置れる望洋臺必多の両家老東辰相荒川清澄又甥雲代四郎白實十郎朝夷三
 弥七浦二郎満呂再太郎安西就介磯崎増松等伴當より又十條立郎十條又八
 胞兄弟いよの時堀内許より召せられ両君公速見参ままつて扈從を君邊に在り
 幸尚三五ふ足らねども最大人ゆうるを人見と譽ぬはるりけりよの折を敵の
 敗將許我の成氏主并ふ両管領の子息憲房朝良朝寧千葉自胤を首とて
 稲戸由充三浦義同其子義武大石憲重長尾為景原胤久齋藤盛盛実等
 俘囚も微りて去の地も在る者も樹影散る為みとく皆饒されんや左右の假屋も
 在り警言固の士卒あふ多かり義通先諸の敗將も對面て礼平く親の誠心を
 舒傳ふるも懇懇の詞を發さるよの故も大塚信乃大江親兵衛大川北村
 政木大全孝嗣等ハ義成主の命より船を洲崎の浦に返してよの日の侍客使より

當下朝良朝寧憲重の孝嗣を見り蓋る色あり孝嗣由亦其の折を以て
 いま欲志の尋ねれども憚りおれ外々々。管待を致すの程然る程夕陰
 西の斜みく法會の讀經果一か、大法師の身を起して船頭を鐵鐵架ふ
 うら向ひ々香を焼水を賻け眼を閉合堂一々舊臘八日水陸三所を戰殺
 する。自他の萬靈施主里見殿の所願ふよりて經亮讀誦の利益違
 へむ往生得脱一蓮托生等見菩提と念ト々且偈を唱る者五言四句
 其聲清亮ふく高けま上の紫微有頂天ふ届るへ下の金輪捺落ま
 せえやまむと思ふ可ふ水と陸との衆人の愕然とら驚くま心小感眼も逆み
 長視する當下、大阿耨多羅三藐三菩提の識算ある數珠を取ら推搦
 又偈を唱へ章を誦し念佛十遍聲の中ふ數珠をうち揮りうち拂ふ縦横を
 尋の法力ふ奇しかる識算の八の玉を串れ。數珠の緒糸と振断離られて

海へ爰と入ると見へけ。那時速一這時速一渦く潮水小波瀾逆立く百十
 萬の白小玉忽焉として立升る。白氣と俱の中天小沖りて宛衆星の。烏夜小晃
 くと異るむ又其許の白小玉亦只數萬の金蓮金華と變と赫奕光
 明粲然没日と共ふ西小靡まぐ搗銷ま如く見へむる隨小天の殘る
 二藍の瑞雲の中ふ音樂せえ暮果るま奏々々。今這奇特を目撃
 其者義通主従犬士の每箱戸由充敵の敗將成氏憲房。朝良朝寧
 自胤のさく義同親子。憲重胤久為景盛實ふ至るま心俱小傲慢の用
 折れて兩敵戰死數萬の亡魂。技苦與樂の利益小遇へるの正小是里見の
 仁義と、大法師の大功徳ふあふと孰うのへ死やとを感嘆敬服せむハ
 る。為小貌を改めていやく後悔まらけ。因る憶ふ小驚襲の至る地水
 火風の四大あり。よく其風を發まふ及びく兵鬪をりて水陸多。大敵を對治

是其所用四大多々也。且始ハ八百比丘尼ハ獲られて風を起シ善小
災一後ハ毛野ガ八百八人の籌策を資けり。是八百の正對多々也。且阿
耨多羅三藐三菩提の九言八箇の玉ハ變りてハ萬鬼を濟度の利益あり。
恁まハ八犬八行の仁義の玉ハ伯仲を初邪物を幫助ハ那宋人の不龜の
藥の比喻も似たり。畢竟ハ大カ水陸道場大施餓饑の本願成就
多々後の話説甚麼ぞや。丹々又下の回ハ解分る哉聽ねか。

作者云前も如く。本回ハ曩ハ腹稿の通り。時全部百十二回ハ
定めて結局裏の題目をハ措けハ今終るハ及びて題目外の話説も
ハ成るぞ。其の故ハ本輯四十六の簡端ハ附録目數ハ條あり。道節
湯嶋ハ兩奸賊を擒ふる段里見の三陳凱旋衆議の段ハ照一見るハ。

南總里見八犬傳第九輯卷之四十七終

